

**李克魯著『実験図解 朝鮮語音声学』（1949年11月、平壤）に対する若干の考察**

著者	熊谷 明泰
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	8
ページ	43-85
発行年	2013-03
その他のタイトル	???? 『???? ??? ???』 ( 1949 ? 11 ? , ?? ) ? ?? ??
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9605">http://hdl.handle.net/10112/9605</a>

## 李克魯著 『実験図解 朝鮮語音声学』 (1949年11月、平壤) に対する若干の考察

리극로의 『실험도해 조선어 음성학』 (1949년 11월, 평양) 에 대한 소고

熊谷明泰  
KUMATANI Akiyasu

< 초록 >

조선어 연구자 리극로(李克魯)는 1920년대 유럽 유학 당시, 최첨단의 음성학을 접한 후 『실험도해 조선어 음성학』을 1947년 11월 15일 서울에서 간행했다(이하 ‘서울판’). 1948년 4월 북조선으로 넘어간 그는 1949년 11월 25일 조선어문연구회(평양)에서 개정 증보판을 간행했다(이하 ‘평양판’). 리극로에 관한 선행연구에서는 단지 이 ‘평양판’이 출판되었다는 사실만을 언급하고 있을뿐이어서 연구자들은 구체적인 내용에 대하여 잘 알지 못하는 것 같다.

본 연구는 ‘평양판’에 새롭게 가필된 부분과 ‘서울판’에서 삭제된 부분에 초점을 맞추어 비교·대조하면서, 두 문헌에 나타난 차이점을 밝히는데 그 목적이 있다.

리극로가 파리 대학에서 조선어 음성연구의 피험자(被驗者)가 된 것에 대해, ‘서울판’의 서문에 “1928년 봄에 一箇月 동안”이라고 쓰여져 있지만, ‘평양판’의 서문에는 “1928년 3월에 한 달 동안”이라고 다시 고쳐져 있다. 여타의 선행연구에서는 “1928년 5월”이라고 쓰여진 것도 보이는 등, 검토를 필요로 하는 사항이다.

리극로는 월북 후, 평양의 국립영화촬영소의 녹음기와 체신성(遞信省)의 오실로그래프를 이용하여 음성연구를 실시하였는데, 그 성과가 ‘평양판’에 가필되어 있다. 조선어 악센트 연구는 월북 작곡가 김순남(金順男)의 협력을 얻었다고 서문에 쓰여 있는데, 경기도의 높낮이·강약 악센트를, 오선지를 사용하여 기술한 것은 그 영향일 수도 있다. 또한, 김순남은 서울 중심지의 낙원동 출신이었기에, 리극로의 경기도 악센트 연구에 있어서 피험자이었을 지도 모른다.

‘평양판’의 어휘·표현 등은, 여러 곳에서 ‘서울판’을 수정한 것이며, ‘평양판’은 조선 고유어의 어소(語素)를 잘 살렸기에 민족성이 뛰어난 문체로 변화였다. 또한 ‘평양판’이 간행되기 한 달 전에 조선어문연구회는 『조선어문법』을 간행했는데, 리극로는 이 문법서의 주요 집필자 중의 한 사람이었다. ‘평양판’은 절음부(絶音符)의 채용, 여린 히읗을 “목청 터짐소리(聲帶破障音)”의 음성표기에 사용하는 등, 『조선어문법』과 유사점도 보인다. 리극로는 조선어연구사에 있어서 빼놓을 수 없는 연구자의 한 사람이며, 아울러 이 ‘평양판’도 재조명되어야 할 것이다.

## キーワード

李克魯 (리극로)、実験図解朝鮮語音声学 (실험도해 조선어음성학)、朝鮮語文研究会 (조선어문연구회)、朝鮮語音声学 (조선어음성학)、朝鮮語学史 (조선어학사)

## 1. はじめに

本稿は、李克魯 (리극로、リ・グンノ<sup>1)</sup>、1893.8.28～1978.9.13) が著した『実験図解 朝鮮語音声学』について、1947年11月15日にソウルで発行された活版本 (以下、「ソウル版」と称す) と、李克魯が1948年に越北した後、1949年11月15日に平壤で発行された活版本 (以下、「平壤版」と称す) を対比しつつ、若干の考察を試みるものである。

李克魯は越北した学者であったため、その華々しい活躍にも拘らず、反共を国是とする韓国では長い間「李〇魯」のように、名前すら伏せ字でしか論じえないような状態が続いていた。1987年に軍事独裁政権を打倒した韓国民主化闘争の後、今ではこうした研究も相当に自由化された。これまで、李克魯の『実験図解 朝鮮語音声学』について韓国でいくつかの研究が発表されてきたが、いずれも「ソウル版」しか取り上げておらず、「平壤版」は韓国では誰も見たことがないようである。

数年前、筆者が滞在していた中国の延吉市内で、馴染みの古本屋の主人が「これ、要らないか」と言いながら、朝鮮語文研究会の「朝鮮語文庫」2冊を見せてくれたが、1冊は田蒙秀・洪起文訳注『訓民正音譯解』(1949年)で、もう1冊がこの「平壤版」だった。かつて、朝鮮語文研究会の『朝鮮語研究』誌上で、この2冊の刊行案内を目にしたことがあり、ともかく買っておいた。本稿で取り上げる「平壤版」は、こうして偶然入手したものだ。最近、北朝鮮の言語学にも非常に詳しい高永根氏 (ソウル大学名誉教授) の著書を読んでいて、李克魯に関する先行研究では、「平壤版」に関しては、そんな本が出たという事実にはしか言及されていないことを知った。その他の研究者の書いたものを見ても、同様だった。こうしたことから、まずは「ソウル版」と「平壤版」を比較検討してみるのも、意味のあることだと考え、筆者は本稿執筆を思い立った。

## 2. 李克魯について

李克魯は1893年、慶尚南道宜寧郡の貧農家庭で、5男3女の末息子として生まれた。農作業の合間に、見様見真似で漢文を学んだあと、1910年に馬山にあったキリスト教系の昌新学校で2年間、朝鮮語や歴史などの新式教育を受けた。1911年、西間島 (鴨緑江上流の北岸地域) に亡命し、奉天省懷仁県にあった大倅教系の東昌学校で愛国啓蒙家朴殷植 (パク・ウンジク) に会ったりして、民族主義思想を深めた。また、撫松県にあった白山学校で教員をしたり、満州

やシベリアを放浪した後、1916年から1920年まで上海でドイツ人経営の同済大学予科（Gymnasium）で学ぶ。卒業後、申采浩（シン・チュホ）の推薦で、コミンテルン第3回大会（1921.6.22～1921.7.12）に参加する朝鮮人革命家李東輝（イ・ドンフィ）の通訳兼警護員としてモスクワに行き、その後、1922年4月にベルリン大学（Friedrich-Wilhelm Universität）に入学して政治経済学を専攻し、言語学と人類学も学びながら、1927年5月に学位論文 *Die Seidenindustrie in China*（「中国の生糸産業」）で、哲学博士学位を取得。また、在学中の1923年10月から1927年まで、ベルリン大学に開設された朝鮮語の講座で、朝鮮語を教えた。

1928年1月からベルリン大学で音声学実験室主任教授の指導の下で、言語学と音声学を学び、同年3月の1か月間、パリ大学の音声学者スラメクの求めに応じて、同大学音声学実験室で朝鮮語音声研究の被験者となった。このときに得た経験や実験データが、その後李克魯が進めた朝鮮語音声学研究に活かされることとなった。同年6月、ロンドン大学のダニエル・ジョーズ教授<sup>2)</sup>を訪問し、そのあとアメリカ、日本経由で1929年1月朝鮮に戻った。また、李克魯はベルリン滞在中の1924年、菊版32頁の小冊子 *Unabhängigkeitsbewegung und japanische Eroberungspolitik*（「朝鮮の独立運動と日本の侵略政策」）を刊行している<sup>3)</sup>。

朝鮮に戻ると、李克魯は朝鮮語学会の核心メンバーとして活躍し、外来語表記法の制定、朝鮮語正書法の制定、標準語査定、朝鮮語辞典編纂事業などに中心的に関わったが、1942年10月、「朝鮮語学会事件」の主犯格として逮捕され、治安維持法に違反したとして6年の実刑判決を受け、1945年8月17日まで投獄された。

解放後の1946年6月、左右の政治的対立、南北分断を乗り越えて独立民族国家の建設を目指した健民会を結社して、委員長に就任した。1948年2月26日に国連小委員会が、国連朝鮮臨時委員団監視下での南朝鮮における単独選挙実施方針を可決すると、健民会もこれに反対し、1948年4月、李克魯は平壤で開催された「全朝鮮諸政党、社会団体代表者連席会議」に健民会代表として出席したあと南朝鮮には戻らず、「朝鮮語及び朝鮮文学研究所」所長（1952年就任）として、長年にわたって平壤で言語研究・言語政策の遂行に力を注いだ。また李克魯は、1948年8月に北朝鮮第1期最高人民会議代議員（南朝鮮代表）に選出されたのを皮切りに、朝鮮民主主義人民共和国建国（1948年9月9日）時の第1次内閣無任所大臣、最高人民会議〔国会に相当する機関〕常任委員会副委員長（1953年就任）、最高人民会議代議員（第2期：1957年選出、第3期：1962年選出、第4期：1967年選出）、祖国統一民主主義戦線議長（1964年就任）、両江道人民委員会副委員長（1972年就任）など、長年にわたって政治の要職に就いていた。

1948年10月に朝鮮民主主義人民共和国教育省内に設置された朝鮮語文研究会（委員長は李克魯）が発刊した月刊雑誌『朝鮮語研究』創刊号（1949年3月31日）巻頭に寄せた「創刊の辞」で、李克魯は次のように植民地時代の悔しい思いに触れている。

「日本帝国主義が膨張し切っていたあの頃、彼らの精神病的な植民地同化政策は、何よりもまず朝鮮語を使えないようにするものだった。そして、彼らは日本語をいつも使えという「国

語常用」とかいうスローガンをあちこちに掲げ、無理極まりない政策を行った。例えば、ある小学校では小学生たちから、朝鮮語をひと言話すたびにいくらかずつ罰金をとっていた。母の乳首を吸いながら覚えた、その親しみ深いことばを使えないようにしていたあの頃のことを思うと、今も歯が震える。」

こうした言説は、朝鮮民族の言語民族主義が、日本帝国主義の植民地統治下で朝鮮語が抑圧された歴史的体験をもとに高揚し、8.15解放後の民族語運動の原点となっていたことを示している。

1952年10月に「朝鮮語及び朝鮮文学研究所」が設置された時も、李克魯が所長を務めている。周時経(チュ・シギョン)の愛弟子だった朝鮮語学者であり、延安派の革命家でもあった金料奉(キム・ドゥボン)が肅清された直後、李克魯は『朝鮮語文』(1958年第4号)に「いわゆる「6字母」の非科学性」(「소위 《6 자모》 의 비과학성」という批判文を公表し、「反党セクト主義者金料奉は、自称朝鮮語学者の振りをしながら…」と口汚くののしりながら、筆を起こしている。この論文は1956年7月に書かれたが、金料奉の妨害によって発表できなかったものである。李克魯と金料奉との間の確執を明らかにすることは、1940年代、1950年代の北朝鮮における言語政策の流れを知るうえで、大変気になるところではある。

李克魯は北朝鮮に渡ってからも音声学研究を進めるとともに、朝鮮語辞典の編纂、文化語政策の遂行などにおいて、一貫して朝鮮民主主義人民共和国における言語政策推進の中心にいた。李克魯はベルリン、パリ、ロンドンで最新鋭の言語研究に接するという、当時の朝鮮人研究者としては稀有な経歴を有し、朝鮮では全く手が付けられていなかった音響音声学による朝鮮語研究の先駆者であって、朝鮮語研究史における欠かすことのできない一人として評価されている<sup>4)</sup>。

### 3. 「平壤版」(1949年)と「ソウル版」(1947年)の内容構成対比

『実験図解 朝鮮語音声学』は、1947年11月15日にソウルの雅文閣から刊行されたが、これは李克魯が1930年代前半期に、朝鮮語学会機関誌『한글』等に発表した諸論文をそのまま転載したり、一部改稿したりして出来上がったもので、この意味で1930年代になされた研究成果とみなされると評価されている。

「平壤版」はA5版で60頁からなり、このほか序文2頁、目次2頁、挿図目録2頁が頁数を打たないまま巻頭に掲げられている。表紙は濃い黄色で、横書きの朝鮮文字のみで上から順に、「조선어문고 제 2 책」(朝鮮語文庫第2冊)、「리극로 지은」(李克魯著)、「실험도해」(実験図解)「조선어 음성학」(朝鮮語音声学)、「1949」と印刷され、最下段に朝鮮文字の横崩し書き(가로풀어쓰기)で発行元名「朝鮮語文研究会」が印刷されている。奥付には、上から順に「1949년 11월 15일 발행」(1949年11月15日発行)、「(조선어 문고 제 2 책)」、「실험도해 조선어 음성학」、「값 30 원」(価格30ウォン)、「지은이 리극로」(著者 李克魯)、「인쇄 태극사 인쇄소 평양시 민본리 9 (전화 4955)」(印刷 太極社印刷所 平壤市民本里9 (電話4955))、「발행 조

선 어문 연구회 평양시 원천리 2 (전화 5428 번)」(発行 朝鮮語文研究会 平壤市元泉里 2 (電話 5428)) と印刷されている。奥付の枠の下に「ㄷ 11768 10,000」と印刷されているが、「10,000」は発行部数を示すものではないかと思われる。「ソウル版」は52頁からなり、サイズは「平壤版」とほぼ同じである。

「ソウル版」、「平壤版」とともに「実験音声学の基礎」と「音の関連性」（「ソウル版」では「音の相関性」となっている）の2章から構成されている。「音の関連性」の章は、主に音韻規則についての論述で、『実験図解 朝鮮語音声学』と銘打った著書としては、その領域外のことまで扱っており、雑多な感が拭えない。李相億（1989：193）は、「ソウル版」を分析した結果、『実験図解 朝鮮語音声学』という書名の割には「実際にその内容自体は、さして実験結果が盛り込まれているとは言えないと評価を下すしかない。もちろん、その当時としては、何枚かの人造口蓋図とカイモグラフすら新奇なものだったと言えるだろうが、それが国語音韻学研究におおきく画期的な寄与を為したとは見ることはできない」と否定的ではあるが、「ただし、音声学に関する研究がほとんどなかった国語学界に、相当早い時期の業績として、このような本が出たということは括目すべき意義が見いだされる」と、朝鮮語研究史上の位置づけを行った。

「平壤版」は「ソウル版」を加筆改稿して刊行されたもので、その基本的な枠組みは大きくは変わっていない。本稿で筆者は「平壤版」と「ソウル版」の内容構成について、章を追って対比してみたが、その結果は、下に示す対照表の通りである。

表紙と奥付はすべて朝鮮文字で印刷されているが、本文中では、たとえば「갈림소리 (摩擦音)、어근 (語根)」のように朝鮮文字の横に括弧で囲んだ漢字表記が多数みられる。北朝鮮では1949年から漢字使用が全廃されたというが、当時、専門書籍などでは依然として、漢字が必要に応じて補助的な位置付けで用いられていた<sup>5)</sup>。

以下の対照表の「頁」欄のカッコ内の数字は、該当ページの行を示す。行を数えるに際しては、挿図は行計算に加えず、文字が記された行だけを数えた。「ソウル版」の章立てでは、「一」「二」と漢数字が用いられているが、見やすいように便宜上、「平壤版」の「Ⅰ」、「Ⅱ」に統一した。

<表> 「平壤版」と「ソウル版」の内容構成対照表

『실험도해 조서어음성학』 朝鮮語文研究会発行、1949年11月15日、平壤		『實驗 圖解 朝鮮語 音聲學』 雅文閣発行、1947年11月15日、ソウル	
頁	章立て・内容	頁	章立て・内容
頁番号なし	表表紙	頁番号なし	表表紙
頁番号なし	머리말 [2頁分]	頁番号なし	머리말 [1頁分]
頁番号なし	목차 [2頁分]	頁番号なし	目次 [1頁分]
頁番号なし	삽도 [挿圖] 목록 [2頁分]		ソウル版には記述ナシ
1(3)~1(4)	Ⅰ 실험 음성학의 기초 (實驗 音聲學의 基礎) [タイトル]	5(2)	Ⅰ 實驗 音聲學의 基礎 [タイトル]

1(5)~1(16)	I-1 소리를 실험하는 방법 .	5(3)~5(9)	I-1 音聲 實驗의 方法
2(1)~2(16)	I-1-(1) 소리의 맑고 흐림을 알아 보는 법	5(9)~5(16)	I-1 的一部分
2(17)~2(20)	I-1-(2) 거센소리 (激音) 의 센 정도를 알아 보는 법	5(16)~5(18)	I-1 的一部分
3(1)~4(8)	I-1-(3) 만든 입천장 (人造口 蓋) 을 리용하는 법	5(18)~6(15)	I-1 的一部分
4(9)~4(14)	I-1-(4) 목안거울 (喉頭鏡) 을 리용하는 법	7(1)~7(4)	I-1 的一部分
5(1)~7	I-1-(5) 오셀로그라프를 리용 하는 법		ソウル版には記述ナシ
8(1)~8(8)	I-2 소리의 생리 (生理)	7(5)~7(16)	I-2 音素의 生理
8(9)~10(1)	I-2-(1) 숨쉬는 기관 (呼吸器官)	7(17)~9(5)	I-2-1 숨쉬는 자리 (呼吸器官)
10(2)~10(3)	I-2-(2) 소리 내는 기관 (發音 器官) 과 소리 고루는 기관 (調 音器官) [タイトル]	9(6)	I-2-2 소리 내는 자리와 고루 는 자리
10(4)~15(5)	I-2-(2)-(가) 울' 대머리 (喉頭)	9(7)~13(13)	I-2-2-(가) 울대머리 (喉頭)
15(6)~15(20)	I-2-(2)-(나) 입안 (口腔)	13(14)~13(19)	I-2-2-(나) 입 (口)
16(1)~16(8)	I-2-(2)-(나)-(ㄱ) 목안 (咽頭)	13(20)~14(2)	I-2-2-(나)-(ㄱ) 목안 (咽頭)
16(9)~16(14)	I-2-(2)-(나)-(ㄴ) 혀 (舌)	14(3)~14(6)	I-2-2-(나)-(ㄴ) 혀 (舌)
16(15)~17(3)	I-2-(2)-(나)-(ㄷ) 입벽 (口壁)	14(7)~14(10)	I-2-2-(나)-(ㄷ) 입벽 (口壁)
17(4)~18(15)	I-2-(2)-(다) 코안 (鼻腔)	14(11)~14(22)	I-2-2-(다) 코 (鼻)
19(1)~21(7)	I-3 조선말의 안센트	15(1)~15(17)	I-3 악센트 (Accent)
21(8)~22(4)	I-4 모음 (母音) 의 나는 리 치 (音理)	15(18)~16(8)	I-4 홀소리 (母音) 發生의 理
	* I-4 的一部分 (22(5)~23(9))	16(9)~20(6)	I-4-1 母音 (홀소리) 의 種類
28(1)~29(2)	I-5 자음 (子音) 의 나는 리치	20(7)~21(9)	I-5 닿소리 (子音) 發生의 理
29(3)~30(7)	I-5-(1) ㅂ, ㅃ, ㅍ, ㅌ	21(10)~22(3)	I-5-(1) ㅂ, ㅃ, ㅍ, ㅌ
30(8)~31(5)	I-5-(2) ㄷ, ㄸ, ㅌ, ㄴ	22(4)~23(1)	I-5-(2) ㄷ, ㄸ, ㅌ, ㄴ
31(6)~32(5)	I-5-(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ	23(2)~23(11)	I-5-(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㅇ
32(6)~33(3)	I-5-(4) ㅅ, ㅆ	23(12)~24(5)	I-5-(4) ㅅ, ㅆ
33(4)~33(15)	I-5-(5) ㅈ, ㅉ, ㅊ	24(6)~25(2)	I-5-(5) ㅈ, ㅉ, ㅊ
34(1)~34(5)	I-5-(6) ㄹ	25(3)~25(8)	I-5-(6) ㄹ
34(6)~34(11)	I-5-(7) ㄽ	25(9)~25(14)	I-5-(7) ㄹ
34(12)~35(6)	I-5-(8) ㅎ, ㆁ, ㅇ	25(15)~26(8)	I-5-(8) ㅎ, ㆁ, ㅇ
35(7)~36(1)	I-5-(9) 조선 말소리의 받침	26(9)~27(4)	I-5-(9) 朝鮮 語音의 받침
36(2)~36	子音의 調音位置 · 調音方式 · 音 의 種類의 一覽表		ソウル版には記述ナシ
37(1)~37(5)	II 소리의 관련성 (關聯性)	28(1)~28(8)	II 音의 相關性
37(6)~37(19)	II-1 소리의 이음 (連音)	28(9)~29(21)	II-1 소리의 이음 (連音)
38(1)~39(13)	II-1-(1) 주종 (主從) 관계로 된 말	29(22)~31(17)	II-1-(1) 으뜸과 붙음의 관계 로 된 말
39(14)~40(17)	II-1-(2) 한' 자가 중합된 말	32(8)~32(19)	II-1-(3) 漢字音의 綜合할 때

40(18)~43(9)	II-2 소리의 끊음 (絶音)	38(3)~40(12)	II-4 소리의 끊음 (絶音)
43(10)~43(12)	II-3 자음의 만나 바꾸임 (子音接變)	32(20)~33(1)	II-2 닿소리의 만나 바꾸임 (子音接變)
43(13)~44(6)	II-3-(1) 거센 소리가 됨 (激音化)	33(2)~33(10)	II-2-(1) 센소리로 바꾸임 (激音化)
44(7)~44(21)	II-3-(2) 코' 소리가 됨 (鼻音化)	33(11)~33(22)	II-2-(2) 코소리로 바꾸임 (鼻音化)
45(1)~45(9)	II-3-(3) ㄹ이 ㄴ이 됨	34(1)~34(8)	II-2-(3) ㄹ이 ㄴ으로 바꾸임
45(10)~45(18)	II-3-(4) ㄴ이 ㄹ이 됨	34(9)~34(14)	II-2-(4) ㄴ이 ㄹ로 바꾸임
45(19)~46(3)	II-4 소리의 줄어짐과 죽어짐 (約音과 默音)	34(15)~34(20)	II-3 소리의 줄거나 죽어짐 (略音과 默音)
46(4)~46(8)	II-4-(1) 같은 모음이 포개지면 하나는 죽어진다	34(21)~35(4)	II-3-(1) 같은 母音이 포개지면 하나는 죽어진다
46(9)~46(14)	II-4-(2) ㄱ이 ㄴ 위에서 죽어진다	35(5)~35(8)	II-3-(2) ㄱ이 ㄴ 위에서 죽어진다
46(15)~47(12)	II-4-(3) ㅈ, ㅊ 밑에 오는 ㄱ으로 시작된 보조어간의 ㄱ은 죽어진다	35(9)~36(3)	II-3-(3) ㅈ, ㅊ 밑에 오는 ㄱ으로 시작된 도움줄기의 ㄱ은 죽어진다
47(13)~48(1)	II-4-(4) ㅎ이 모음 사이에서 죽어짐	36(4)~36(8)	II-3-(4) ㅎ음이 母音 사이에서 죽어진다
48(2)~48(6)	II-4-(5) 겹받침이 한 소리가 죽어짐	36(9)~36(12)	II-3-(5) 여러 子音이 한 때에 .....
48(7)~48(14)	II-4-(5)-(가) ㄱ, ㄴ, ㅁ 의 사이 죽는 것	36(13)~36(16)	II-3-(5)-(가) ㄱ, ㄴ, ㅁ 의 사이 죽는 것
48(15)~48(22)	II-4-(5)-(나) ㄹ, ㄷ, ㄹ 의 ㄹ이 거의 죽거나 또는 죽는 것	36(17)~37(2)	II-3-(5)-(나) ㄹ, ㄷ, ㄹ 의 ㄹ이 거의 죽거나 또는 죽는 것
49(1)	II-4-(6) 모음 ㅣ와 ㅓ ㅕ가 반모음이 됨 [タイトル]	37(3)~37(4)	II-3-(6) 한 母音이 그 밑에 바로 오는 母音을 만난 複母音이나 半母音이 되어서 한 音節이 줄어지는 것 [タイトル]
49(2)~49(15)	II-4-(6)-(가) ㅣ가 ㄱ를 만나서 반모음이 되어 한 음절이 줄어진다	37(5)~37(15)	II-3-(6)-(가) ㅣ가 ㄱ를 만나서 變하는 것
49(16)~50(6)	II-4-(6)-(나) ㅓ가 ㄴ를, ㅕ가 ㄱ를 만나서 반모음이 됨	37(16)~38(2)	II-3-(6)-(나) ㅓ가 ㄴ를, ㅕ가 ㄱ를 만나서 變하는 것
50(7)~50(21)	II-5 우리말 받침법의 특징	46(22)~47(15)	II-7 音의 長短, 單複, 받침법, 口蓋音化 [この節の後半部の一部]
51	II-5 조선 말소리의 일람표	40(13)~41(2)	II-5 조선 말소리의 보기틀
52(1)~52(5)	II-5 예사소리 (平音), 된소리 (硬音), 거센소리 (激音) 의 서로 다른 점	41(3)~41(4)	II-5 조선 말소리의 보기틀
	平壤版には記述ナシ	41(5)~42(2)	II-6 文字와 音聲 記號
52(6)~53(16)	모음 사각도 (母音 四角圖)	42(3)~44(3)	II-6 朝鮮語音과 萬國 音聲 記號와의 對照



	「받침법」の部分は、「平壤版」ではII-5で記述されている。「音의 長短, 單複, 口蓋音化」の部分は、「平壤版」には記述されていない。	44(6)~47(20)	II-7 音의 長短, 單複, 받침법, 口蓋音化 [この節の後半部の一部]
54	II-5 모음의 입모양 그림(1) 넓은 모음 (ㅣ, ㅣ', ㅐ, ㅐ', ㅓ, ㅓ')	48	母音口形圖 (ㅣ, ㅣ', ㅐ, ㅐ', ㅓ, ㅓ')
55	II-5 모음의 입모양 그림(2) 예사 모음 (ㅡ, ㅡ', ㅑ, ㅑ', ㅓ, ㅓ', ㅕ, ㅕ')	49	母音口形圖 (ㅡ, ㅡ', ㅑ, ㅑ', ㅓ, ㅓ', ㅕ, ㅕ')
56	II-5 모음의 입모양 그림(3) 둥근 모음 (ㅗ) (ㅗ, ㅗ', ㅛ, ㅛ', ㅜ, ㅜ', ㅠ, ㅠ')	49 50	母音口形圖 (, , , ' ) 母音口形圖 (ㅗ, ㅗ', ㅛ, ㅛ')
57	II-5 모음의 입모양 그림(4) 둥근 모음 (ㅜ) (ㅜ, ㅜ', ㅠ, ㅠ', ㅝ, ㅝ')	50	母音口形圖 (ㅜ, ㅜ', ㅠ, ㅠ')
58	II-5 카이모그래프 (旋回運動記錄計) (비, 뻘, 피)	51	旋回運動記錄計 Kymograph (비, 뻘, 피)
59~60	II-5 혀의 위치로 된 모음사각	52	혀의 位置로 된 母音 四角圖이 基準
頁番号なし	奥付	頁番号なし	奥付

#### 4. 「平壤版」(1949) 序文と「ソウル版」(1947) 序文の比較検討

「ソウル版」の序文(머리말)に比べ、「平壤版」の序文では、冒頭部分に8行、終わりの部分に11行にわたって加筆されている。冒頭部分では音声学を学ぶことの意味と重要性を唱え、終わりの部分では、平壤でオシログラフを用いた実験をして新たな研究資料を得たこと、発音する際の口の形の写真を撮ったこと、朝鮮語アクセントの実験で作曲家金順男(キム・スンナム)<sup>6)</sup>の協力を得たことを加筆している。

上記のことを反映して、「平壤版」20頁には「オシログラフを利用する方法」が加筆され、21頁、22頁にはオシログラフの写真が新たに5葉掲載されている。また、「平壤版」54頁から57頁に載せられた母音発音時の口の形を撮った写真は、「ソウル版」にはない横顔写真も付け加えられている。

「平壤版」20頁、21頁では五線譜を描いて「京畿地方のことばを標準とした朝鮮語アクセント」を説明しており、2音節語(간다)は「レ>ド」、3音節語(아버지)は「レ-ミ>b-ド」、4音節語(우리들이, 레-레-ミ>b-ド; 물레방아, ミ b-레-미 b-ド)、5音節語(장난하다가, 레-ミ>b-레-미>ド)と読み取れるが、この作業には作曲家金順男の協力が反映されているように思われる。(「>」は強弱アクセントを表示)

以下、「平壤版」と「ソウル版」の序文全文を紹介する。冒頭部分の文章は、「平壤版」で新たに書き加えられたものである。

序文の冒頭部分での加筆

「平壤版」(1949)	日本語訳
<p>말소리의 생리적 (生理的) 관계 (關係) 와 물리적 (物理的) 관계 (關係) 와를 연구 (研究) 하는 학문 (學問) 이 곧 음성학 (音聲學) 이다. 어학 (語學) 을 연구하려면 무엇보다도 먼저 음성학 (音聲學) 의 기초 (基礎) 지식 (知識) 을 가지지 않고는 그 목적 (目的) 을 완전 (完全) 히 이루기가 어려운 것이며, 또 국어 연구에 뜻하는 이는 반드시 조선어 음성학의 연구로부터 시작하여야 한다. 그리고 이것은 외국어 (外國語) 를 공부 하는 데도 상당한 도움이 될 것이다.</p>	<p>言語音の生理的關係と物理的關係とを研究する學問が、すなわち音声学である。語学を研究しようとするならば、何よりもまず音声学の基礎知識を持たずしては、その目的を完全に達成することが難しいであろうし、また国語研究を志す方は、必ず朝鮮語音声学の研究から始めなければならない。そして、これは外国語を勉強するうえでも、相当に役立つことだろう。</p>

以下に示す「平壤版」序文の中間部分では、パリ大学での朝鮮語音声の実験で、李克魯が1928年3月に毎日6時間ずつ被験者となっていたこと、カイモグラフの実験資料を入手したこと、「外来語表記統一案」（1940年発表）の作成作業に1931年1月から加わったことなどが加筆されている。

序文の中間部分

「平壤版」(1949年) 序文の中間部分	「ソウル版」(1947) 序文の冒頭部分
<p>이 책을 쓰게 된 것은 내가 일찌기 베를린, 파리, 런던에서 여러 음성학자 (音聲學者) 로 더불어 조선어 음성 (音聲) 을 론 (論) 한 바 있었는데, 그 중에도 특히 파리 대학 (大學) 음성학 (音聲學) 실험실 (實驗室) 에서 1928년 3월에 한 달 동안 스라메크 교수 (教授) 의 요청 (要請) 으로 나는 조선어 음성 (音聲) 의 실험 (實驗) 대상 (對象) 이 되어서 매일 여섯 시간씩 실험실 (實驗室) 에 앉았던 일이 있다. 그 때에 쓰던 나의 만든 입천장 (人造口蓋) 으로 써 발음 (發音) 위치 (位置) 를 확정 (確定) 하는 재료 (材料) 와 또 카이모그래프로 실험 (實驗) 한 재료를 얻었다. 그리고 1931년 1월에 조선어 학회 (朝鮮語學會) 에서 외래어 표기법 통일안 (外來語表記法統一案) 을 작성하기 위하여 성안 위원회를 조직함에 있어서 그 위원 (委員) 의 한 사람이 되매, 더욱 조선 어음 (語音) 의 과학적 (科學的) 근거 (根據) 를 세우기에 계을 수가 없었다.</p> <p>本書を書くことになったのは、私がかつてベルリン、パリ、ロンドンで何人かの音声学者とともに朝鮮語音声について論じたことがあったが、その中でも特にパリ大学音声学実験室で、1928年3月に1か月間スラメク教授の要請で、私は朝鮮語音声の実験対象となり、毎日6時間ずつ実験室に座っていたことがある。その時に使っていた人造</p>	<p>이 책을 쓰게 된 것은 내가 일찌기 베를린, 파리, 런던에서 여러音聲學者로 더불어 朝鮮語音聲을 論한 바 있었는데 그 中에도 特別히 파리 大學音聲學 실험실에서 西曆 一九二八年 봄에 一 個月 동안 스라메크 教授의 請으로 나는 朝鮮語音聲의 實驗 對象이 된 일이 있다. 그 때에 쓰던 나의 人造口蓋로써 發音 位置를 確定하는 材料을 얻었다. 그리고 朝鮮語學會에서 外來語 表記法 統一案을 내게 되어 그 成案 委員의 一人이 되매, 더욱 朝鮮語音의 科學的 根據를 세우기에 계을 수가 없었다.</p> <p>本書を書くことになったのは、私がかつてベルリン、パリ、ロンドンで何人かの音声学者とともに朝鮮語音声について論じたことがあったが、その中でも特にパリ大学音声学実験室で、西曆1928年の春に1か月間、スラメク教授の要請で、私は朝鮮語音声の実験対象となったことがある。その時に使っていた人造口蓋で発音位置を確定する材</p>

<p>口蓋で発音位置を確定する材料と、またカイモグラフで実験した材料を得た。そして、1931年1月に朝鮮語学会で外来語表記法統一案を作成するために、成案委員会を組織するに当たり、その委員の一人となり、更に朝鮮語音の科学的根拠を打ち立てることに、精力を傾けなければならなかった。</p>	<p>料を得た。そして朝鮮語学会で外来語表記法統一案を作成することになり、その成案委員の一人となったので、更に朝鮮語音の科学的根拠を打ち立てることに、精力を傾けなければならなかった。</p>
--	---

以下に示す「平壤版」での加筆部分は、上に紹介した「ソウル版」の文に続く「그러나 아직 우리 나라에는 音聲學 實驗室이 없는 것만큼 充分한 實驗을 하지 못한 것만은 遺憾이다.」(しかし、わが国には未だ音声学実験室がないだけに、実験が出来ないのは遺憾である。)という記述部分に対する「平壤版」での改筆・加筆である。この加筆部分で、朝鮮語のアクセントの実験で作曲家金順男の協力を得たと書かれているが、本稿5-11で紹介されている京畿道アクセントの調査は、ソウル市中心の楽園洞で生まれた金順男を被験者として行ったものかも知れない。

序文の終わりの部分での加筆

「平壤版」(1949)	日本語訳
<p>그러나 아직 우리 나라에는 음성학(音聲學) 실험실(實驗室)이 없어서 충분한 실험을 하지 못하였다.</p> <p>다행히 이번 이 책을 쓰는데 있어서는 국립 영화 촬영소(國立映畫撮影所)의 녹음기(錄音機)와 체신성(遞信省)의 “오셀로그라프” 기계를 음성(音聲)의 실험에 리용하게 되어 새로운 재료를 더 얻었다. 그리고 또 발음의 입모양 사진을 박는데 있어서 국립 예술 극장 예술인의 수고가 많았고, 또는 우리 말 악센트 실험에 있어서 작곡가 김순남선생의 수고가 많았다.</p> <p>이상에 말씀한 여러 기관과 인사들의 협조에 대하여 깊이 감사의 뜻을 표하여 마지 아니한다.</p>	<p>しかし、未だわが国には音声学の実験室がないので、充分な実験が出来なかった。</p> <p>幸いなことに、このたび本書を書くにあたって、国立映画撮影所の録音機と通信省の「オシログラフ」機を音声の実験に利用することとなり、新たな材料をさらに得た。そしてまた、発音の口の形の写真を撮るにあたり、国立芸術劇場の芸術家に多くの苦勞をおかけし、また朝鮮語アクセントの実験において、作曲家金順男(キム・スンナム)先生にご苦勞をおかけした。</p> <p>上に申し上げた諸機関と皆様のご協力に対して、深く感謝の意を表します。</p>

序文の末尾には、「더 완전한 것으로 만들 고자하는 바이다」<sup>5)</sup>(より完全なものにしようと思う次第である。)と加筆されている。

「ソウル版」の序文では、「西暦 1928 年春に 1 か月間」パリ大学で音声の被験者になったと書かれているが、「平壤版」の序文では「1928 年 3 月に 1 か月間」と、より明確に書き直されている。李克魯博士記念事業会(2010: 83)や朴龍圭(2005: 235)に載せられた年譜では、これとは違って「1928 年 5 月の 1 か月間」とされている。

序文の最末尾は、「ソウル版」では「檀紀四二八〇年三月 지은 이 씀」となっているが、北朝鮮では檀紀を用いなかったため、「平壤版」では「1949 年 10 月 평양에서 지은 이 씀」(1949 年 10 月 平壤にて、著者記す)と書き直されている。また、この序文を含め、「平壤版」のどこ

にも、それが「ソウル版」を改訂増補したものであることについての言及がなされていないが、発行月日はなぜか両者とも同じ11月15日となっている。

#### 序文の最末尾

「平壤版」（1949年）序文の最末尾	「ソウル版」（1947年）序文の最末尾
<p>끝으로 불완전하나마 이 조고마한 책이 국어 연구와 국어 교육에 다소라도 도움이 된다면 다행으로 생각하는 동시에, 앞으로 여러분의 도움을 얻어 더 완전한 것으로만들고자 하는 바이다.</p> <p>1949년 10월 평양에서 지은이 씀</p> <p>最後に不完全ではあるが、このささやかな本が国語研究と国語教育に多少とも役に立つならば幸いであると思うとともに、今後皆様のご協力を得てより完全なものにしたいと思う次第です。</p> <p>1949年10月 平壤にて 著者記す</p>	<p>이 不完全한 것이나마 國語 研究에 多少라도 도움이 된다면 多幸으로 생각하는 바이다.</p> <p>檀紀 四二八〇年 三月 지은 이 씀</p> <p>この不完全なものでも、国語研究に多少とも役に立つならば幸いに思う次第です。</p> <p>檀紀 四二八〇年 三月 著者記す</p>

### 5. 「ソウル版」（1947）本文と「平壤版」（1949）本文の対照分析

本稿では、「ソウル版」と「平壤版」を比べて、「平壤版」での加筆・書き換えなどが比較的多く見られる部分を取り上げ、対照表を作成して、以下に示すことにする。「平壤版」で下線を引いたところは新たに加筆された部分である。「ソウル版」で破線を引いたところは、「平壤版」では削除された部分である。日本語訳は筆者によるものである。

#### 5-1.

「平壤版」での加筆部分は、人造口蓋は舌が口蓋に触れる位置を確認する器具であることを説明している。また、「ソウル版」の「大部分の母音や子音」は、「平壤版」では「母音でも子音でも」と書き換えられ、さらに、「ソウル版」は、人造口蓋が母音や子音の調音位置を確定する「最も重要な」器具だと書いているが、「平壤版」では「最も重要な」という語句が省かれている。

「平壤版」（1949）3頁3行目～5行目	「ソウル版」（1947）5頁18行目～6頁2行目
<p>이 만든 입천장은 모음 (母音) 이나 자음 (子音) 이나, 그 나는 자리, 곧 혀와 입천장의 서로 닿는 자리를 시험하는 기구이다.</p> <p>この人造口蓋は母音でも子音でも、その発音される位置、すなわち舌と口蓋が互いに触れる位置を試す器具である。</p>	<p>이 人造 口蓋는 大部分의 홀소리 (母音) 나, 닿소리 (子音) 의 나는 자리를 確定하는 데는 <u>가장 중요한</u> 器具이다.</p> <p>この人造口蓋は大部分の母音や子音の発音される位置を確定するうえで、<u>最も重要な</u>器具である。</p>

5-2.

下記の対照表からすぐわかるように、「平壤版」では漢字を用いる時は必ず括弧で囲み、朝鮮文字で表記された語の意味理解を助ける補助的機能を果たす形で用いられている。また、「ソウル版」の「平・硬・激」のような容易に理解しがたい語は、「平壤版」では「뽕 (硬), 거셈 (激), 또는 예사임 (平)」のように、朝鮮固有語での置き換え語を示している。「人造口蓋」に対して、朝鮮固有語の語素による造語「만든 입천장」を用いて朝鮮語の民族性を高めながら、括弧の中に「人造口蓋」と従来の漢字語を補助表記する方法がとられている。「ソウル版」の「1. 音聲 實驗의 方法」(音声実験の方法)を「平壤版」では「1. 소리를 실험하는 방법 (音を実験する方法)」と書き換えられている。このように平易な表現に言い替えて、言文一致文体を確立していこうとする試みが随所で試みられている。

「平壤版」(1949) 1頁	「ソウル版」(1947) 5頁2行目~9行目
<p>I. 실험 음성학의 기초 (實驗 音聲學의 基礎)</p> <p>1. 소리를 실험하는 방법</p> <p>실험 음성학은 소리의 <u>나는 자리, 고저 (高低), 강약 (強弱), 장단 (長短), 청탁 (淸濁), 뽕 (硬), 거셈 (激), 또는 예사임 (平) 들을, 곧 소리가 어디서 어떻게 나는가를 연구하는 자연과학이다.</u> 그 실험 방법은, 간단한 만든 입천장 (人造口蓋) 을 리용하는 방법으로부터 복잡한 “카이모그래프” 와 “오셀로그래프” 같은 발달된 기계를 리용하여 알아 보는 여러가지 길이 있다. 이러한 기구나 기계로 알아 내는 밖애, 소리나는 자리의 움직임을 눈으로 보거나, 소리를 귀로 듣거나, 또는 손을 대어 느끼어 보는 법들이 있다.</p> <p><u>이제 간단히 누구나 할 수 있는 실험 방법의 몇가지를 들어 보면 다음과 같다.</u></p> <p>I. 實驗音声学の基礎</p> <p>1. 音を實驗する方法</p> <p>實驗音声学は言語音の發音される位置、高低、強弱、長短、淸濁<sup>6)</sup>、硬音(濃音)、激音、または平音などを、すなわち音がどこどのように發音されるのかを研究する自然科学である。その實驗方法は、簡単な人造口蓋を利用する方法から、複雑な“カイモグラフ”と“オシログラフ”のような發達した機械を利用して調べるいろいろなやりかたがある。このような器具や機械で調べだすほかに、發音される位置の動きを目で見たり、音を耳で聴いたり、あるいは手を当てて感じてみる方法などもある。</p> <p><u>ここで、簡単に誰にでもできる實驗方法のいくつかを取り上げると、以下の通りである。</u></p>	<p>一. 實驗 音聲學의 基礎</p> <p>1. 音聲 實驗의 方法</p> <p>實驗 音聲學은 말소리의 位置, 高低, 強弱, 長短, 淸濁, 平·硬·激 들을 研究하는 自然 科學이다. 그 實驗 方法은 簡單한 人造 口蓋로부터 複雜한 카이모그래프와 오셀로그래프까지 여러 가지로써 測定하는 것이 있다. 이런 機械的 測定 밖에 發音 하는자리의 움직임을 눈으로 보거나 소리를 귀로 듣거나 또는 손을 대어서 느끼어 보는 것이다.</p> <p>一. 實驗音声学の基礎</p> <p>1. 音声実験の方法</p> <p>實驗音声学は言語音の位置、高低、強弱、長短、有聲・無聲、平音・硬音(濃音)・激音などを研究する自然科学である。その實驗方法は簡単な人造口蓋から複雑なカイモグラフとオシログラフまで、いろいろと測定するものがある。このような機械的測定のほかに、發音する位置の動きを目で見たり、音を耳で聴いたり、あるいは手を当てて感じてみるのである。</p>

5-3.

下記の対照表の「平壤版」の最後のほうで加筆されている部分は、声帯振動と「有声音」、「無

声音」との関係を追加説明したものである。

「소리의 청탁 (清濁)」（音の清濁）の「清」に「맑음」、「濁」に「흐림」と訓を付すなど、朝鮮固有語の語素を活用して、わかりやすく言い換えている。

また、1948年に朝鮮語文研究会が制定した「朝鮮語新綴字法」第31項・第32項・第33項の規定を反映して、「손'가락」のように「絶音符」が用いられている。「絶音符」は「朝鮮語綴字法」（1954年）では「사이표」（サイピョ）と言い換えられ、「朝鮮語規範集」（1966年）で基本的に廃止された。「ソウル版」の「손을 대어」が「平壤版」では「손을 대여」と書き換えられているのも、「朝鮮語新綴字法」第56項の規定を反映させたものである。このように、「平壤版」では「新六字母」こそ用いられてはいないが、基本的に「朝鮮語新綴字法」に準拠した表記がなされている。

「平壤版」（1949）2頁1行目～16行目	「ソウル版」（1947）5頁9行目～16行目
<p>(1) 소리의 맑고 흐림을 알아 보는 법 우리가 소리의 청탁 (清濁), 곧 맑음과 흐림을 알아보려면, 소리낼 때에 손'가락 끝을 목청 (聲帶) 곁 (붙어진 뼈의 위쪽 오목한 자리) 에 대보면 곧 알 수가 있으니, 맑은 소리이면 목청이 떨지 아니하므로 손'가락 끝에 떨리는 느낌이 조금도 없으나, 흐린 소리이면 손'가락 끝에 마치 전기 (電氣) 가 통하는 것과 같이 찌르르하는 떨리는 느낌이 있다. 목청에 손'가락 끝을 대고 “ㅅ” 나 “ㅆ” 를 소리내 보면, 손'가락 끝에 아무런 느낌도 없으나, “ㄷ, ㄸ” 들의 모음이나 “ㄹ, ㄴ” 를 소리내 보면, 찌르르하는 느낌이 있다. 이것은 목청이 떨기 때문이요, 앞의 것은 목청이 떨지 않기 때문이다. 목청이 떨리는 소리를 유성음 (有聲音) 이라 하고, 목청이 떨지 않는 소리를 무성음 (無聲音) 이라 한다. 이와 같이 목청이 떨고 안 떠는 것은 이마에 손을 대여 보거나, 또는 손'가락으로 귀구멍을 막아 보아 떨리는 느낌이 있고 없음으로 쉽게 알아 볼 수가 있다.</p>	<p>우리가 소리의 清濁을 알아 보려면 發音할 때에 손가락 끝을 목청 곁에 (붙어진 뼈의 위쪽 오목한 자리) 대면 곧 알 수가 있으니 清音이면 목청이 떨지 아니하므로 떨리는 느낌이 조금도 없으나 濁音이면 마치 電氣가 통하는 것과 같이 찌르르하는 떨리는 느낌이 있다. 이 밖에 또 이마에 손을 대어 보거나 또는 손가락으로 귀구멍을 막아 보아도 떨리는 느낌이 있다.</p>
<p>(1) 音の澄み (有聲)・濁り (無聲) を調べる方法 私たちが音の清濁 (有聲・無聲)、すなわち澄んでいるか濁っているかを調べようと思えば、発音するとき指先を声帯の上 (突き出た骨の上方のくぼんだところ) に当ててみるとすぐわかるが、澄んだ音なら声帯が震えないので、指先に震えを少しも感じないが、濁った音だと指先にまるで電氣が流れたかのようなビリビリと震える感じがする。声帯に指先を当て、“ㅅ” [s] や “ㅆ” [ʃs] を発音してみると、指先に何も感じないが, “ㄷ, ㄸ” [a,ɸ] などの母音や “ㄹ, ㄴ” [m,n] を発音してみると、ビリビリと感じる。これは声帯が震えるためであり、前者は声帯が震えないためである。声帯が震える音を有声音といい、声帯が震えない</p>	<p>私たちが音の清濁 (有聲・無聲) を調べようと思えば、発音するとき指先を声帯の上に (突き出た骨の上方のへこんだところ) 当てるとすぐわかるが、清音なら声帯が震えないので、震えを少しも感じないが、濁音だとまるで電氣が流れたようにビリビリと震える感じがする。このほかに、また顔に手を当ててみたり、または指で耳の穴を塞いでみても、震える感じがする。</p>

音を無声音という。  
 このように声帯が震えるか震えないかは、額に手を当ててみたり、または指で耳の穴を塞いでみたりしても、震える感じの有無で容易に確認できる。

5-4.

「ソウル版」第1章の1. 「音聲 實驗의 方法」の最後に追加されるような形で、「平壤版」には以下の文が加筆されている。

「平壤版」の序文に、「国立映画撮影所の録音機と逋信省の「オシログラフ」機を音声の實驗に利用することとなり、新たな材料をさらに得た。」と書かれているが、この加筆部分はこのことに関連している。「平壤版」に掲載された「第4 図」はオシログラフ機の全景写真、「第5 図」はオシログラフの照明鏡に光波が現れた状態の写真、「第6 図」は、発声映画（トーキー）にあらわれる音波の写真を紹介したものである。「平壤版」で加筆された部分を日本語訳と共に以下に示す。

「平壤版」(1949) 5頁 [[ソウル版] 7頁 4行目の後に加筆されている]	日本語訳
<p>(5) 오셀로그라프를 리용하는 법                  오셀로그라프는 광(光) 소리(音) 전기(電氣) 등의 모든 진동(振動)의 파형(派形)을 분석(分析)하고 측정(測定)하는 기계<sup>7)</sup>인데, 싸운드 아다치먼트(振動板) 반사경(反射鏡<sup>8)</sup>) 뿌리즘렌즈 조명경(照明境<sup>9)</sup>) 진공관(眞空管) 등을 가진 가장 복잡한 구조를 가지고 있는 것이다. 이 기계에 마이크(擴聲器)를 달고, 마이크를 통하여 말을 하면, 그 음파(音波)의 강약이 전류(電流)의 강약(強弱)으로 변하고, 전류의 강약은 진동판(振動板)을 진동(振動)시키고, 이에 따라서 반사경(反射境<sup>10)</sup>) 이 진동(振動)하여 전파(電波)를 광파(光波)로 변하고, 이 광파(光波)가 앞쪽<sup>11)</sup>에있는 조명경(照明境<sup>12)</sup>)에 나타다가게된다<sup>13)</sup>.</p> <p>이 광파(光波)에는 진동수(振動數) 진폭(振幅) 등이 나타나며 음(音)의 고저, 장단, 강약(高低, 長短, 強弱)이 완전히 나타나게 되면, 음색(音色)까지 나타나므로, 말하는 음파(音波)를 직접 눈(眼)으로 볼수 있는 것이다. 그리고 이 조명경(照明境<sup>14)</sup>)에 나타나는 광파(光波)를 특수(特殊)한 장치로 된 사진기로 촬영할수 있는 것이니, 음성학을 실험(實驗)하는 좋은 기계이다.</p> <p>그리고, 발성영화(發聲映畵) 필름에 나타나는 음파(音波)도 이 오셀로그라프와 같은 원리(原理)이므로 이것도 음성학 실험(實驗)에 리용되는 기계다. (제 4,5,6 도 참조)</p>	<p>(5) オシログラフを利用する方法                  オシログラフは光、音、電氣などのすべての振動の波形を分析し、測定する機械だが、サウンド・アタッチメント(振動板)、反射鏡プリズム、レンズ、照明鏡、真空管などをもつ最も複雑な構造を有しているものである。この機械にマイク(拡声器)をつけ、マイクを通して話をすれば、その音波の強弱が電流の強弱に変わり、電流の強弱は振動板を振動させ、これに伴って反射鏡が振動し、電波を光波に変え、この光波が前方にある照明鏡にあらわれることになる。</p> <p>この光波には振動数、振幅などがあらわれ、音の高低、長短、強弱が完全にあらわれることとなり、音色まであらわれるので、話す音波をじかに目で見るのできるのである。そして、この照明鏡にあらわれる光波を、特殊な装置からなる写真機で撮影することができるので、音声学を實驗する良い機械である。</p> <p>そして、発声映画(トーキー)のフィルムにあらわれる音波も、このオシログラフのような原理なので、これも音声学の實驗に利用される機械である。(第4、5、6 図参照)</p> <p>(第4 図) オシログラフ機の全景                  (第5 図) オシログラフの照明鏡にあらわれる光波                  (第6 図) 発声映画(トーキー)にあらわれる音波</p> <p>* 「조선」(朝鮮)、「사람」(ひと)、「공민권」</p>

<p>(제 4 도) 오셀로 그래프 기계 전경 [写真省略]                  (제 5 도) 오셀로 그래프의 조명경 (照明鏡) 에 나타나는 광파 (光波) [写真省略]                  (제 6 도) 발성 영화에 나가나는 압파 (音波) [写真 3 葉省略]</p>	<p>(公民權) を発音したときの音波の写真3葉が7頁に載せられている。[訳注-熊谷]</p>
---	---

5-5.

「ソウル版」の「喉頭」は、「平壤版」では朝鮮固有語での用語「울'대머리」に置き換えられ、喉頭についての解説が加筆されている。また、「ソウル版」の用語「방패여린뼈 (甲狀軟骨)」、「가락지여린뼈 (環狀軟骨)」が、「平壤版」では「방패모양 여린뼈 (甲狀軟骨)」、「고리모양 여린뼈 (環狀軟骨)」に変えられている。

<p>「平壤版」(1949) 10頁5行目～11頁3行目</p> <p>이 울' 대머리는 방패모양 여린뼈 (甲狀軟骨) 와, 고리모양 여린뼈 (環狀軟骨) 와, 목청을 고루는데 쓰이는 고름 여린뼈 (調整軟骨) 두 날을 둘러싼 근육으로 만들어진 공실 (空室) 인데, 그 안에, 곧 방패모양 여린뼈와 고름 여린뼈 사이에 있는 두 질긴 띠 (靱帶) 를 목청이라 하고, 두 목청의 틈을 소리문 (聲門) 이라 한다.</p> <p>この喉頭は甲狀軟骨と、リング状の環狀軟骨と、声帯を調整するのに用いられる調軟骨の2つを取り囲んだ筋肉でできた空室だが、その中に、つまり甲狀軟骨と調整軟骨の間にある2つの靱帯を声帯といい、二つの声帯の隙間を声門という。</p>	<p>「ソウル版」(1947) 10頁1行目～3行目</p> <p>이 喉頭는 방패여린뼈 (甲狀軟骨) 와, 가락지 처럼 된 가락지여린뼈 (環狀軟骨) 와 목청을 고루는 데에 쓰이는 고름여린뼈 (調整軟骨) 두 날으로 이루어졌다. 甲狀軟骨과 調整軟骨의 사이에 있는 두 질긴 띠 (靱帶) 를 목청 (聲帶) 이라 하고 두 聲帶 틈을 소리문 (聲門) 이라 한다.</p> <p>この喉頭は甲狀軟骨と、指輪状の環狀軟骨と声帯を調整するのに用いられる調整軟骨の2つからなっている。甲狀軟骨と調整軟骨の間にある2つの靱帯を声帯といい、二つの声帯の隙間を声門という。</p>
---	--

5-6.

上記 5-5 に続く部分で、以下の加筆が行われているが、ここでは声帯振動と有声・無声の関係について述べている。そして、ここでは有声音を「소리」、無声音を「숨」と呼んでいる。次の 5-7 で紹介するように、このことについて、「平壤版」は「息を原料と見なした音を清音といい、声を原料とした音を濁音という」(숨을 원료로 삼은 음을 청음 (清音) 이라하고, 소리를 원료로 한 음을 탁음 (濁音) 이라고 부른다) と解説している。

<p>「平壤版」(1949) 11頁3行目～7行目 * 「ソウル版」10頁5行目「……소리문 (聲門) 이라」の後</p> <p>목청은 좌우로부터 두 쪽이 나와 있는데, 입술과 같이 서로 맞닿는다. 공기가 나올 때에 열리었다 닫히었다 하여, 두 쪽이 서로 떨어지면, 소리 (有聲音) 가 되나, 저절로 열리어 있을 때에는 숨 (無聲音) 으로 나온다. 말 소리 (語音) 에는 이 둘이 다 쓰인다.</p>	<p>日本語訳</p> <p>声帯は左右から2片が出ているが、唇のように互いに合わさる。空気が通るときは開いたり閉じたりし、2片が互いに震えると有声音となるが、自然に開いている時は無声音として出てくる。言語音では、この両者とも用いられる。</p>
--	---



5-7.

「ソウル版」での用語「聲門、振動、聲帯、有聲子音」が「平壤版」では「소리문、떨림、목청、흐린 자음」と朝鮮固有語に変えられ、また「ソウル版」の「氣流」は「공기」、「ソウル版」の「振動시기면」は「떨게 하면」、「ソウル版」の「聲帯作用」は「목청의 작용 (作用)」へと、「平壤版」では平易な言い方に変えられている。「ソウル版」の「聲 (Voice)」が「平壤版」で「소리 (聲)」と変わっているのは、英語の用語使用を忌避した結果かも知れない。

「平壤版」(1949) 12頁11行目～13頁16行目	「ソウル版」(1947) 11頁15行目～12頁4行目
<p>우리가 예사로 숨쉴 때에는 소리문이 넓게 열리어 있기 때문에, 공기가 아무 거침 없이 그 틈으로 나들므로 아무 떨림이 일어나지 못하되, 한번 목청이 켜기여서 소리문이 적당하게 좁아져서 날' 숨의 기운이 목청을 떨게 하면 악음 (樂音) 이 나타나니, 이것을 음성학 (音聲學) 에서 “소리” (聲) 이라고 하여, “숨” 곧 열린 소리문을 통하여 나오는 공기와 구별한다.</p>	<p>우리가 예사로 숨쉴 때에는 聲門이 넓게 열린 때문에 氣流가 아무 거침 없이 그 틈으로 나들므로 아무 振動이 일어나지 못하되 한 번 목청이 켜겨서 聲門이 適當하게 좁아져서 날숨의 기운이 聲帶를 振動시키면 樂音이 나타나니 이것을 音聲學에서 聲 (Voice) 이라고 한다.</p>
<p>말의 소리에는 목청의 작용 (作用) 이 있는 것도 있고, 또 없는 것도 있다. 목청의 작용은 세 가지가 있으니, 모음과 흐린 자음으로 가장 많은 작용은 떨림 (振動) 인데, 모두 그 “소리” 를 원료 (原料) 로 삼고있으며, 그 다음에는 목청을 좁히여서 생기는 갈림 (摩擦) 이고, 또 하나는 목청을 닫았다가 터치여서 생기는 터침 (破障) 인데, 숨을 원료로 삼은 음을 청음 (淸音) 이라 하고, 소리 를 원료로 한 음을 탁음 (濁音) 이라고 부른다. 그러나 입이나 코의 작용으로 나는 많은 소리는 예사 숨쉴 때와 같고 아무 탄 작용은 없다.</p>	<p>말의 소리에는 聲帶作用이 있는 것도 있고, 또 없는 것도 있다. 聲帶作用은 세 가지가 있으니 母音과 有聲子音의 關係로 가장 많은 작용은 振動이요, 그 다음에는 聲帶를 좁히는 데에서 생기는 摩擦과 또 닫는 데에서 생기는 破障이다. 그러나 또 입이나 코의 작용으로 나는 許多한 소리에는 예사 숨쉴 때와 같고 아무 탄 것은 없다.</p>
<p>私たちが普段息をするときは、声門が広く開いているために、空気が何の障害もなくその隙間を出入りするので、如何なる振動も引き起こしえないが、声門が緊張して声門が適当に狭まると、吐く息の力が声帯を振動させると楽音が出るが、これを音声学で声といい、“息”すなわち開いた声門を通して出てくる空気と区別する。</p>	<p>私たちが普段息をするときは、声門が広く開いているために、氣流が何の障害もなくその隙間を出入りするので、いかなる振動も引き起こしえないが、声門が緊張して声門が適当に狭まると、吐く息の力が声帯を振動させると楽音が出るが、これを音声学で声 (Voice) という。</p>
<p>ことばの音には声帯の作用があるものもあり、またないものもある。声帯の作用は3種類あるが、母音と有聲子音で最も多い作用は振動であるが、すべてその“声”を原料と見做しており、その次は声帯を狭めて生じる摩擦であり、もう一つは声門を閉じてから破裂させて生じる破裂だが、息を原料と見なした音を清音といい、声を原料とした音を濁音と呼ぶ。しかし、口や鼻の作用で出る多くの音は、普段息をするときと同じで、何も異なる作用はない。</p>	<p>ことばの音には声帯の作用があるものもあり、またないものもある。声帯の作用は3種類あるが、母音と有聲子音の關係で最も多い作用は振動であり、その次には声帯を狭めることから生じる摩擦と、また閉じることから生じる破裂である。しかしまた、口や鼻の作用で出る多くの音には、普段息をするときと同じで、何も異なる作用はない。</p>

5-8.

喉頭蓋の機能について、「平壤版」でわかりやすい説明を加筆している。「ソウル版」の「밥길(食管)・울대마개」は、それぞれ「平壤版」では「식도(食道)・울대막애」と変えられているが、「울대막애」は形態主義表記を徹底させた綴字である。

「平壤版」(1949) 16頁1行目～8行目	「ソウル版」(1947) 13頁19行目～14頁2行目
<p>(ㄱ) 목안(咽頭)                  이것은 울' 대머리(咽頭) 위의 공간이니, 울' 대(氣管)와 식도(食道)와 입과 코로 통하는 곳이다. 울' 대와 식도의 사이에는 울' 대막애(會厭)가 있고, 입과 코의 사이에는 목젓이 있다. 울' 대막애는 음식물을 삼킬 때에 울' 대의 덮개가 되는 것으로, 예사 때에는 일어서서 울' 대의 숨' 길을 열고 있다. 이 목안은 수동적 기능(受動的機能<sup>15)</sup>)을 가질 뿐이요, 제 스스로 활동하지 못한다.</p> <p>(ㄱ) 咽頭                  これは咽頭の上の空間で、氣管と食道と口と鼻に通じるところである。氣管と食道の間には喉頭蓋があり、口と鼻の間には口蓋垂がある。喉頭蓋は食べ物を飲み込むとき、氣管の蓋となるもので、普段は立って氣管の氣道を開いている。この咽頭は受動的機能を有するだけで、それみずからの活動はなしえない。</p>	<p>(ㄱ) 목안(咽頭) :                  咽頭 위의 空間이니 울대(氣管), 밥길(食管), 입, 코로 터진 곳이다. 울대와 밥길의 사이에는 울대마개(會厭)가 있고 입과 코의 사이에는 목젓이 있다. 이 목안은 受動的 機能을 가질 뿐이요, 제 스스로 變動이 없다.</p> <p>(ㄱ) 咽頭 :                  咽頭の上の空間で、氣管、食道、口、鼻に通じるところである。氣管と食道の間には喉頭蓋があり、口と鼻の間には口蓋垂がある。この咽頭は受動的機能を有するだけで、それみずから變動を引き起こすことはない。</p>

5-9.

軟口蓋、硬口蓋、口蓋垂について、「平壤版」ではわかりやすく、より具体的な説明を加筆している。

「平壤版」(1949) 16頁15行目～17頁3行目	「ソウル版」(1947) 14頁7行目～14頁10行目
<p>(ㄷ) 입벽(口壁)                  이것은 여섯 자리를 갈라 본다. 끝 목젓, 여린 입천장(軟口蓋), 센 입천장(硬口蓋), 이' 몸, 이, 입술 들이다. 입천장의 딱딱한 곳은 센 입천장이고, 그 뒤쪽 연한 곳은 여린 입천장이고, 여린 입천장 뒤 끝이 목젓이다. 이 목젓과 여린 입천장은 아래 위로 움직일 수 있으며, 압안 소리를 낼 때에는 이것을 울리어서 코안으로 통하는 길을 막고, 코' 소리를 낼 때에는 이것을 드리워서 코안으로 소리가 통하게 된다. 여린 입천장과 센 입천장 사이의 경계는 손' 가락으로 만져서 그 연하고 딱딱한 느낌으로써 가리여 볼 수가 있다.</p> <p>(다) 口壁                  これは6つの場所に分けてみる。すなわち、口蓋垂、軟口蓋、硬口蓋、齒莖、齒、唇である。口</p>	<p>(ㄷ) 입벽(口壁) :                  여섯 자리를 갈라 본다. 목젓, 여린 입천장(軟口蓋), 센 입천장(硬口蓋), 잇몸, 이, 입술 들이다. 여린 입천장과 센 입천장 사이는 손가락으로 만져서 가려 볼 수가 있다.</p> <p>(다) 口壁 :                  6つの場所に分けてみる。口蓋垂、軟口蓋、硬口蓋、齒莖、齒、唇である。軟口蓋と硬口蓋の間</p>

<p>蓋の硬いところは硬口蓋で、その奥の方の軟らかいところは軟口蓋で、軟口蓋の奥の行き詰まりが口蓋垂である。この口蓋垂と軟口蓋は上下に動かすことができ、口腔音(口音)を発音する時は、これを上げて鼻腔に通じる通路を閉ざし、鼻腔音(鼻音)を発音するときはこれを垂らして鼻腔に音(Voice)が通るようになる。軟口蓋と硬口蓋の間の境目は指で触って、その軟かさと硬さで識別してみることができる。</p>	<p>は指で触って識別してみることができる。</p>
---	----------------------------

5-10.

「平壤版」では、発音する時の鼻腔の機能に関する説明を加筆している。また、「共鳴管」は「平壤版」では「울림통」と書き換えられている。

「平壤版」(1949) 17頁4行目～18頁7行目	「ソウル版」(1947) 14頁11行目～14頁22行目
<p>(다) 코안 (鼻腔) 코안은 목안의 윗 앞쪽에 있어, 뒤는 목안으로 통하고, 앞은 코' 구멍으로 터지여 있다. 한 고정(固定)된 울림통으로, 소리낼 때에 목젓을 떼면 그리로 기운이 통하여 코' 소리가 나게 된다. 코안으로 통하는 길은 코' 소리가 아닌 소리를 낼 때에는 닫히여 있는 것이 보통이다. 코안에는 그곳을 지나가는 공기를 막거나 가리우는 설비가 있기 때문에, 소리낼 때의 코안의 역할은 목청의 소리(유성음이나 무성음이나 다)를 울리는데 지나지 않는다. 예사로 숨칠 때에는 숨이 코안으로부터 목을 통하여 울' 대로 들어가서 폐에 이르고, 폐<sup>16)</sup>에서 다시 본래 오던 길을 거쳐서 밖으로 내보내는데, 이때에 입은 닫히여 있는 것이 보통이다.</p>	<p>(다) 코 (鼻) 코안은 목안의 윗앞 쪽에 있어 뒤는 목안으로 터지고 앞은 콧구멍으로 터졌다. 한 固定된 共鳴管으로 소리낼 때에 목젓을 떼면, 그리로 기운이 통하여 코소리가 나게 된다.</p>
<p>(다) 鼻腔 鼻腔は口腔の前方にあり、後ろは口腔に通じ、前は鼻の穴に通じている。一つの固定した共鳴管で、発音するとき口蓋垂を離せば、そちらに空気が通って、鼻音が発音されるようになる。 鼻腔に通じる通路は、鼻腔音でない音を出す時は閉ざされているのが普通である。鼻腔にはそこを通過する空気を塞いだり、さえぎる装置があるために、発音する時の鼻腔の役割は、声帯の声(有声音も無声音も、いずれも)を響かせるだけに過ぎない。 普段息をするときは、息が鼻腔から喉を通過して喉頭に入って肺に至り、肺から再びもと来た通路を経て外に送り出すが、このとき口は閉ざされているのがふつうである。</p>	<p>(다) 鼻 鼻腔は口腔の前方にあり、後ろは口腔に通じ、前は鼻の穴に通じている。一つの固定した共鳴管で、発音するとき口蓋垂を離せば、そちらに空気が通って、鼻腔音が発音されるようになる。</p>

5-11.

方言アクセントについて、「ソウル版」では「畿湖地方・湖南地方」、「嶺南地方・關北地方」の2区画で論じたが、「平壤版」では「西海岸地域」、「東海岸地域」の2区画で論じている。「ソウル版」では、「畿湖地方・湖南地方」では第2音節にアクセントがあるとしているが、「平壤版」では、「西海岸地域」では最後から2番目の音節にアクセントがあるとしている。



「平壤版」での加筆部分では、朝鮮語の標準を「京畿地方のことば」とし、その高低アクセントを五線譜上に3段階（ド、レ、ミb）の高低差で表示し、朝鮮語アクセントは「高低と強弱を兼ねたもの」であるとして、強勢を持つ音節には五線譜上に印（<）を付している。

朝鮮語文研究会が刊行した『朝鮮語文法』（1949年10月）は、「平壤版」の刊行と時を同じくして刊行されたもので、この文法書は朝鮮民主主義人民共和国内閣第10号決定書「朝鮮語文に関する決定書」（1948年10月2日附）による国家的事業として執筆され、このために朝鮮語文研究会専門研究委員会内部に置かれた文法編修分科委員会の構成員12名のうち、李克魯が筆頭にその名を並べている。この『朝鮮語文法』の第1篇第6章「語音の高低と長短」で、「朝鮮語のアクセントは高低アクセントとみることができ、音節の間的高低関係は際立ってはいないが、高低の異なりによって語の意味が変わる」（43頁-44頁）と説明したあと、例として、「말을 타다」（馬に乗る）の말（馬）は高調、말로 되다（枴で量る）の말（枴）は中調、말을 잘하다（話がうまい）の말（はなし）は低調だとしている。そして、「この3段階（高・中・低）のアクセントの違いは、特に慶尚道地方で明確で、京城地方では普通、高と中の差が明確でなく、高低の2段階しか区別しない」と書かれている。「平壤版」では京畿地方のアクセントを3段階の高低で説明しているが、京畿地方の「京城」（ソウル）以外の方言を対象とした調査なのか否かは明らかではない。

「ソウル版」の用語「單語、一音節、一文」は、「平壤版」ではそれぞれ「낱말（單語）、한 음절、한 문장（文章）」と書き換えられ、「ソウル版」の「揚音符、低音符、昂低音符」は、「平壤版」ではそれぞれ「올림소리 부호（揚音符）、내림소리 부호（抑音符）、올림 내림소리 부호（揚抑符）」と書き換えられ、朝鮮固有語を多く用いるようにされている。

「平壤版」（1949）19頁10行目～21頁7行目	「ソウル版」（1947）15頁9行目から17行目
<p>또 악센트는 두 음절 이상으로 된 낱말(單語)에만 있는 것이 아니라, 한 음절로 된 낱말에도, 혹은 한 문장(文章)에도 있다. 한시(漢詩)의 평측(平仄)이나, 또는 시(詩)의 음률적 미(音律的 美)는 이것을 응용한 것이다. 특히 서양말 시에 그 현저한 경향을 볼 수 있다. 악센트 부호(符號)는 그릭(希臘) 문법으로부터 나온 것인데, 올림소리 부호(揚音符) “ˊ”, 내림소리 부호(抑音符) “ˋ”, 올림 내림소리 부호(揚抑符) “ˊˋ”의 세 가지가 있다.</p>	<p>또 악센트는 二音節 以上の 單語에만 있는 것이 아니라, 一音節의 單語 혹은 一文에도 있다. 漢詩의 平仄이나 또는 많은 西洋語의 詩들의 音律的 美는 이것을 應用한 것이다. 악센트 符號는 希臘 文法으로부터 나온 것인데 揚音符 ˊ 低音符 ˋ 昂低音符 ˊˋ 三種이 있다. 朝鮮語에 있어서는 악센트가 地方에 따라 다른데, 畿湖나 湖南 地方의 말에는  둘째 音節에 악센트가 있지만 嶺南이나 關北 地方의 말에는 大體로 첫 音節에 있다.</p>

1. 조선말의 악센트는 고저 강약 (高低強弱) 을 겸한 것이다.
  2. 우리말의 악센트는 동해안 지역과 서해안 지역의 두 갈래로 구별되다.
  3. 서해안 지역의 악센트는 끝으로 둘째 음절에 있다. 4 음절 5 음절은 악센트가 두 곳에 있으며, 뒤의 악센트가 앞의 것보다 강하다. 그러므로 악리적 (樂理的) 으로 고찰할 때에는 동해안 지역에 비하여 선율적 (旋律的) 이다.
  4. 동해안 지역은 악센트가 언제나 첫 음절에 있다. 4 음절과 5 음절 때에는 악센트가 두 곳에 있으며, 앞의 것이 뒤의 것보다 강하다. 그러므로 서해안 지역에 비하여 다이내믹 (DyNaMic) 하다.
- 경기 (京畿) 지방 말을 표준으로 한 우리말의 악센트는 다음과 같다.

2 음절	3 음절
	
간 다	아 버 지

간다, 온다, 길다, 짧다, 바다, 다리, 목숨, 서울, 대문, 강물  
아버지, 어머니, 경기도, 평안도, 예술가, 사랑방, 박서방, 앞마을, 한마디, 집으로

4 음절



우 리 들 이 물 레 방 아

5 음절



장 난 하 다 가

우리들이, 오라버님, 하라버지<sup>17)</sup>, 실오래기, 물방아간, 물레방아, 왔다갔다, 오동나무, 팔도강산, 뽕짝뽕짝 장난하다가, 죽을찌언정, 하느님께서, 말씀하시면, 인민공화국

また、アクセントは2音節以上からなる単語にだけあるのではなく、1音節からなる単語にも、あるいは一つの文にもある。漢詩の平仄や、または詩の音律的美はこれを応用したものである。特に西洋語の詩にその顕著な傾向を見ることが出来る。アクセント符号はギリシャ文法に由来するが、揚音符「´」、抑音符「`」、揚抑符「^」の3種類がある。

また、アクセントは2音節以上の単語にだけあるのではなく、1音節の単語、あるいは一つの文にもある。漢詩の平仄や、または多くの西洋語の詩の音律的美はこれを応用したものである。アクセント符号はギリシャ文法に由来するが、揚音符「´」、低音符「`」、昂低音符「^」の3種類がある。朝鮮語においてはアクセントが地方によって異なるが、畿湖や湖南地方のことばには第2音節にアクセントがあるが、嶺南や閔北地方のことばには、大部分、第一音節にある。

1. 朝鮮語のアクセントは、高低と強弱を兼ねたものである。
2. 朝鮮語のアクセントは、東海岸地域と西海岸地域の2通りに区別される。

<p>3. 西海岸地域のアクセントは最後から2番目の音節にある。4音節と5音節はアクセントが2か所があり、後ろのアクセントが前のものより強い。だから楽理的に考察する時、東海岸地域に比べて旋律的である。</p> <p>4. 東海岸地域はアクセントがいつも第一音節にある。4音節と5音節の時、アクセントが2カ所にあるが、前のものが後ろのものより強い。だから、西海岸地域に比べてダイナミックである。</p> <p>京畿地方のことばを標準とした朝鮮語のアクセントは、次のとおりである。[以下、訳文省略]</p>
---

## 5-12.

ここで、朝鮮語が10母音体系を有すると説明しているが、朝鮮語学史上、このように10母音体系を主張したのは、朝鮮語学史上、李克魯が最初だと見られている。

「平壤版」(1949)22頁5行目～22頁14行目	「ソウル版」(1947)16頁9行目から16頁15行目
<p>모음의 종류 단모음 (單母音) 조선마에는 “ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅡ ㅜ ㅗ ㅛ ㅠ” 열 가지의 단모음이 있다. 이 소리들을 낼 때의 혀의 자리를 보건데, “ㅏ”를 표준하여 혀의 앞이 높아가는 소리의 순서는 “ㅑ ㅓ ㅕ” 혀의 뒤가 높아가는 소리의 순서는 “ㅜ ㅗ”, 혀의 가운데가 높아가는 소리의 순서는 “ㅛ ㅠ” 로 된다. 그런데 이 모음들은 다 각각 그 보통의 길이 보다는 긴 소리가 있다.</p> <p>母音の種類 單母音 朝鮮語の母音には “ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅜ, ㅗ, ㅛ, ㅠ” の 10 個の單母音がある。これらの音を發音する時の舌の位置を見ると、ㅏを標準として舌の前が高くなっていく音の順序は ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅕ, 舌の後ろが高くなっていく音の順序は ㅜ, ㅗ, ㅗ, 舌の真ん中が高くなっていく順序は ㅛ, ㅠ、とところでこれらの母音は、すべてそれぞれ、普通の長さよりは長い音がある。</p>	<p>1. 모음 (홀소리) 의 種類 朝鮮 말의 母音은 ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅜ, ㅗ, ㅛ, ㅠ, ㅠ 十個의 單母音이 있다. ㅏ를 中心하여  혀의  앞이  높아  가는  소리의 順序는 ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅕ,  혀의  뒤가  높아  가는  소리의 順序는 ㅜ, ㅗ, ㅗ,  혀의  가운데가  높아  가는 順序는 ㅛ, ㅠ,  그런데  이 母音들은  다  各々 그  普通의  길이보다  는  긴  소리가  있다.</p> <p>1. 母音の種類 朝鮮語의 母音은 ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅜ, ㅗ, ㅛ, ㅠ, ㅛ, ㅠ의 10 個의 單母音이 有하다. ㅏ를 中心에 舌의 前이 高くなって いく 音의 順序는 ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅡ, ㅕ, 舌의 後ろ가 高くなって いく 音의 順序는 ㅜ, ㅗ, ㅗ, 舌의 眞ん中이 高くなって いく 順序는 ㅛ, ㅠ、と 此處에서 這些의 母音은、皆 各々 普通의 長さ 比로 長은 音이 有하다.</p>

5-13.

李克魯は、アレア(・)の音価に関する自説の説明において、「ソウル版」では「ト舌 ㄱ唇音인 單母音」という理解しにくい説明法だったものを、「平壤版」では「後ろ[後舌]のト[a]音の舌の位置と、ㄱ音[o]よりもっと大きく開いた円唇音の單母音(뒤ト소리의 혀자리와 ㄱ소리보다 더 크게 벌린 둥근 입술소리인 단모음)」と、よりわかりやすく書き換えている。

「平壤版」(1949) 23頁14行目～24頁4行目	「ソウル版」(1947) 17頁15行目から17頁20行目
<p>또 예' 말에 적힌 것을 재료로 삼아 음운변천(音韻變遷)의 길을 살피어 본 바, 뒤 ㅏ소리의 혀자리와 ㅑ소리보다 더 크게 벌린 둥근 입술소리인 단모음이라는 것으로 단안을 내릴자신을 가지었던 까닭이다. 그 뒤로는 별로 그럴만한 새로운 재료를 얻지 못하고 있던 가운데, 1940년에 경상북도 의성(義城)군의 어떤 고가(古家)에서 찾아낸 고문헌(古文獻) 훈민정음 진본(眞本)을 보게 되매, 거기에서 얻은 자료는 먼저' 번에 쓴 그 작은 문문을 그냥 그대로 증명하고 말았다. 그래서 지금 제주도 사투리의 “·” 소리는 훈민정음을 지을 그때의 소리인 것을 의심하지 아니한다. “·” 소리를 더 정확하게 말하면, 뒤 ㅏ보다 조금 더 높은 혀의 자리에, ㅑ보다 더 크게 벌린 둥근 입술로 내는 단모음이다. 곧 만주글의 끝의 홀소리 “ㄴ”의 소리와 같은 것이다.</p> <p>훈민정음 진본의 해례(解例) 제자해(制字解)에,</p>	<p>또 古語에 적힌 것을 材料로 삼아 音韻 變遷의 經路를 살피어 본 바 ㅏ舌 ㄱ唇音인 單母音이란 것으로 斷案을 내릴 自信을 가지었던 까닭이다. 그 뒤로는 別로 그럴 만한 새로운 材料를 얻지 못하여 더 留意를 아니 하고 오는 가운데 이번 에 貴重한 새로운 古文獻을 보게 되어 거기에서 얻은 材料는 먼저 번에 쓴 그 小論文을 그냥 그대로 證明하고 말았다. 그래서 이제 濟州方言의 “·” 音價는 訓民 正音 制定 當時 音인 것을 疑心하지 아니한다. “·” 音價를 더 正確하게 말하면 後部 ㅏ보다 더 높은 舌位에 ㅑ보다 더 큰 全開圓唇形으로 發音하는 單母音이다. 濟州 語音의 끝의 母音인 “ㄴ”의 音價와 같은 소리다.</p> <p>最近에 發見된 訓民 正音眞本의 制字解 가운데</p>
<p>また、古語に記されたものを材料にして音韻變遷の過程を考察してみたところ、後ろのト[a]音の舌の位置と、ㄱ[o]音よりもっと大きく開いた円唇音の單母音であるということで断案を下す自信を抱いていたわけである。そのあとは、別にさほどの新たな資料を得られず、それ以上留意しなかったなかで、このたびの貴重な新たな古文獻を見ることとなり、1940年に慶尚北道義城のある旧家で見つけ出した古文獻、訓民正音真本を見ることになったが、そこから得られた資料は、以前書いた小論文を、そのまま証明してしまった。だから、いま濟州島方言の“·”音は、訓民正音を制定したその時の音であることを疑わない。“·”音をより正確に言えば、後ろのトよりも少し高い舌の位置に、ㄱよりもより大きく開いた円唇で発音する單母音である。すなわち、満州文字の最後の母音“ㄴ”の音と同じものである。</p> <p>訓民正音真本の解例 制字解に</p>	<p>また、古語に記されたものを材料にして音韻變遷の過程を考察してみたところ、ト舌、ㄱ唇音である單母音という断案を下す自信を抱いていたのである。そのあとは、別にさほどの新たな資料を得られず、それ以上留意しなかったなかで、このたびの貴重な新たな古文獻を見ることとなり、そこから得られた材料は、以前書いた小論文を、そのまま証明してしまった。だから、いま濟州方言の“·”の音価は訓民正音制定当時の音であることを疑わない。“·”の音価をより正確に言えば、後部トよりより高い舌位に、ㄱよりもより大きな全開円唇形で発音する單母音である。満州語音の最後の母音である“ㄴ”の音価と同じ音である。</p> <p>最近發見された訓民正音眞本の制字解のなかで、</p>

5-14.

「ソウル版」では「朝鮮語の重母音は-ㅓ一つだけである」と書かれているが、「平壤版」では、-ㅓの單母音化が進み、「朝鮮語の重母音は、今ではないと見ることができる」と書き換えてい

る。5-11で触れた『朝鮮語文法』（1949年10月、41頁）の第1篇第5章「二重母音」でも「一音節内にある2つの母音を二重母音という。朝鮮語では二重母音としては“-i”1つしかない。しかし、この音も次第に単母音化する傾向を見せている。」と書き、「平壤版」と一致した説明となっている。

なお、『朝鮮語文法』は、上記の記述に続けて、월, 약なども[半母音+母音]なので二重母音とみなしがたいとし、また、李克魯の主張と同様に、「母音の前にある半母音は子音の性格を持つ」と書いている。

さらに、「平壤版」27頁で、「ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ」については、「半子音 i (i) と “ㅏㅑㅓㅕ” が合わさってできた一つの音節であり、重母音ではない」としている。「ソウル版」の母音図では舌の位置（開口度）を3段階で描いているが、「平壤版」ではアレア（・）の調音位置を明確にするために、4段階に変更している。

また、ㅑやㅓに補助記号を付けた「ㅑゝ」や「ㅓゝ」も書き込んでいるが、これらはㅑやㅓよりも長母音で、より高舌であることを示している。「平壤版」51頁では、「ㅑゝ」は「ソウルを中心とした中部朝鮮で用いられる方言音。例：“없다”のㅑ」と説明し、「ㅓゝ」は「済州島の方言音」と説明されている。

アレアの音価を説明するのに、「ソウル版」では『訓民正音』の原典そのまま引用して「ㅏ與・同而口張」、「ㅓ與・同而口蹙」、「ㅕ與一同而口蹙」、「ㅑ與一同而口張」と書いているが、「平壤版」ではそれぞれ「ㅏは・と同じだが、口を広げろ」、「ㅓは・と同じだが、口をすぼめろ」、「ㅕは一同と同じだが、口をすぼめろ」、「ㅑは一同と同じだが、口を広げろ」と、誰にでもわかるように現代語に翻訳している。

「平壤版」（1949）24頁19行目～27頁8行目	「ソウル版」（1947）18頁18行目～19頁7行目
<p>그런데·의 음' 가는 이제 제주도 사투리의 그 음' 가와 꼭 같다. ㅏ는·와 같은데 입을 벌리라고 하였으니, ㅓ보다는 입을 좁힌 것이요, ㅕ는·와 같은데 입을 오무리라 하였으니, ㅑ보다는 입을 더 벌린 소리이다. ㅕ는 一와 같은데 입을 오무리라 함과, ㅑ는 一 같은데 입을 벌리라는 음' 가 설명을 가지고, 이제 우리가 발음하고 있는 그 음' 가들을 대조하여 볼 때에 조금도 틀림이 없다. 그래서 우리는 [·]<sup>18)</sup> 소리의 혀의 위치와 입술 모양을 확정할 수 있다.</p> <p>모음의 음' 가를 규정하는 네 가지 요소(要素) 로써 볼때에 ·는 뒤 혀의 위치, 낮은 혀의 자리요, 턱을 벌리는 각도(角度)는 큰 각도요, 입술은 둥글게 하여 내는 소리이다.</p> <p>다른 모음과의 관계를 밝히기 위하여 아래와 같은 도표(圖表) 를 보임.</p>	<p>그런데·音價는 이제 濟州 方言의 그 音價와 一致하다. “ㅏ與·同而口張” 하라 하였으니, ㅓ보다는 입을 좁힌 것이요, “ㅓ與·同而口蹙” 이라 하였으니, ㅕ보다는 입을 더 벌린 音이다. “ㅕ與一同而口蹙” 과 “ㅑ與一同而口張” 이란 音價 說明을 가지고, 이제 우리가 發音하고 있는 그 音價들을 對照하여 볼 때에 조금도 틀림이 없다. 그래서 우리는·音의 舌位와 唇形을 確定할 수 있다.</p> <p>母音의 音價를 規定하는 四大 要素로써 볼 때에 後舌位의 低舌音이요, 또 大唇角의 圓唇音이다.</p> <p>다른 母音과의 關係를 밝히기 爲하여 아래와 같은 圖標를 보임.</p>



		혀자리			
		앞	가운데	뒤	
턱벌림	씩적음	ㅣ (ㄱ)	ㅡ ㄱ	ㅍ (-)	거의단음
	적음	ㅣ (ㄴ)	ㅣ ㄴ	ㅌ (-)	반단음
	예사	ㅣ (ㅇ)	ㅣ ㅇ	· (-)	반열음
	큼		ㅌ ㅌ		다열음
		넓음	예사	등금	
		입술모양			

조선말의 중모음(重母音)은 이제는 없다고 볼 수도 있다. 중모음이 차차 단모음(單母音)으로 변화하여 온 것은 쉽게 증명할 수 있다. 예를 들면,

- ㅣ ㅣ가 ㅌ로 변한 것  
사이(鳥, 間) → 새
- 가이(犬) → 개
- 아이(兒) → 애
- ㄱ ㄱ이 ㅌ로 변한 것  
거이(蟹) → 개
- ㅌ ㅌ이 ㅌ로 변한 것  
오이(瓜) → 외
- ㅍ ㅍ이 ㅌ로 불ㄴ한 것  
수뵈(易) → 쉬
- ㅡ ㅌ가 ㅌ로 변한 것  
그의(其人) → 괴

로 된다.

여기에서 우리는 “의”가 단모음으로 변화여 가는 과정에 있는 것을 알겠다. “의”는 “으”와 “이”의 중간 위치에서 나는 소리로 볼 수 있다.

곧 로어의 “bi” 소리에 가까운 것이다.

【주의】“ㅌ ㅌ ㅌ ㅌ”는 반자음 ㅣ (i)와 “ㅌ ㅌ ㅌ ㅌ”가 합하여 된 한 음절(音節)이요, 중모음은 아니다.

ところで、·의音価は、いまや濟州島方言のその音価と全く同じである。ㅌは·と同じだが、口を広げるだけにしろといったので、ㅌよりは唇を狭めたものであり、ㅌよりは唇を開きをより大きくした音である。ㅌは·と同じだが、口をすぼめるといったことと、ㅌは·と同じだが、口を広げるという音価の説明をもって、いまや私たちが発音しているその音価を対照してみると、少しも間違っていない。だから私たちは [·] <sup>19)</sup> 音の舌の位置と唇の形を確定することができる。

		舌位別			
		前位音	中位音	後位音	
腭角別	小角音	ㅣ	ㅡ	ㅍ	高舌音
	中角音	ㅣ	ㅣ	ㅌ	平舌音
	大角音	ㅣ	ㅌ	·	低舌音
		廣唇音	平唇音	圓唇音	
		唇形別			

朝鮮語의 重母音은 ㅌ 하나 뿐이다. ㅌ ㅌ ㅌ ㅌ 들은 半子音인 ㅣ (J)와 合한 한 音節들이요, 重母音은 아니다.

ところで、·의音価は、いまや濟州方言のその音価と一致する。「ㅌ與·同而口張」せよといったので、ㅌよりは唇を狭めたものであり、「ㅌ與·同而口蹙」せよといったので、ㅌよりは唇の開きがより大きい音である。「ㅌ與·同而口蹙」と「ㅌ與·同而口張」という音価の説明をもって、いまや私たちが発音しているその音価を対照してみると、少しも間違っていない。だから私たちは·音の舌の位置と唇の形を確定することができる。

<p>母音の音価を規定する4つの要素としてみる時に、・は後舌の位置、低舌の位置であり、顎を開く角度は大きな角度であり、唇は丸めて出す音である、</p> <p>他の母音との関係を明らかにするため、以下のような図表を示す。</p> <p>(*図は上に転載したとおりで、ここでは省略)</p> <p>朝鮮語の重母音は、今ではないと見ることができ、重母音が次第に単母音に変わってきたことは、たやすく証明することができる。例えば、</p> <p>(*例は上記のとおりで、ここでは省略)となる。</p> <p>ここで私たちは“의”が単母音に変わっていく過程にあることがわかるだろう。“의”は“으”と“이”の中間の位置で出る音とみることができ、つまり、ロシア語の“bi”音に近いものである。</p> <p>【注意】“ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅠ”は半子音 i (i) と“ㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅠ”が合わさってできた一つの音節であり、重母音ではない。</p>	<p>母音の音価を規定する4大要素としてみる時には、後舌位の低舌音であり、また大きく顎を開いた円唇音である。</p> <p>他の母音との関係を明らかにするため、以下のような図を示す。</p> <p>(*図は上に転載したとおりで、ここでは省略)</p> <p>朝鮮語の重母音は-ㅓ-一つだけである。ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅠは半子音である i (i) の合わさった一つの音節であり、重母音ではない。</p>
--	---

5-15.

「ソウル版」の「すべての子音は声帯を震わせないで発音する無声音のほか、」という説明の前に、「平壤版」では「鼻音を帯びた子音以外の」を加筆することによって、より明確な説明となっている。

「平壤版」では硬音（濃音）の構成部分として破擦音を加筆して、より厳密な記述となっている。音声学用語については、「顫動音」はふるえ音、「破障音」は破裂音、「破障摩擦音」は破擦音のことである。また、「ソウル版」での「破障音、摩擦音、顫動音、破障摩擦音」は「平壤版」では「터침소리（破障音）、갈림소리（摩擦音）、갈림소리（摩擦音）、떨림소리（顫動音）、터쳐갈림소리（破擦音）」と書き換えられ、「硬音、激音、平音」は「된소리（硬音）、거센 소리（激音）、예사소리（平音）」と書き換えられている。

「ソウル版」の「聲帯破障音、聲帯摩擦音」は、「平壤版」ではそれぞれ「목청 터침소리（聲帯破障音（“으,?”））、목청 갈림 소리（聲帯摩擦音 “ㅎ, h”）」と書き換えられている。

ここで声門閉鎖に対して、「ㅎ」（「平壤版」では、誤植で으となっている）を用いてその発音を示している。ところで、李克魯も主要な執筆者であった朝鮮語文研究会の『朝鮮語文法』は、「平壤版」刊行のわずか1か月前に刊行されたもので、この子音の分類一覧表（同書14頁）には喉頭破裂音としてㅎが含められ、音価は[?]とされている。また、新六字母の一つとして、시옷変則用言の語幹末子音ハの代わりに、音声環境によって[s]と[ゼロ]が交代する形態音素を表示する字母として用いることにしていた。

訓民正音創制時の東国正韻式漢字音表記で、「以影補來」として用いられたㅎは、入声/t/の中国漢字音が朝鮮語に入ると有声音のㅏで発音されるため、これを無声音/t/で発音しろ

という印としても用いられたことから、もともと、ㄱは必ずしも声門閉鎖を表していたわけではない。

「平壤版」(1949) 28頁1行目～28頁16行目	「ソウル版」(1947) 20頁7行目～21頁9行目
<p>5. 자음 (子音) 의 나는 리치  자음 (子音=닿소리) 은 발음 기관 곧 입술이나 혀나 목청이나 목젖을 붙이어서 터치거나, 좁혀서 갈거나 붙이었다가 떼었다가 하여 나는 소리이다.  그리하여 자음은 그 작용에 따라 터침소리 (破障音), 갈림소리 (摩擦音), 떨림소리 (顫動音) 터쳐갈림소리 (破擦音) 의 네 가지가 있고, 터치는 때에 코' 구멍을 통하여 울리는 코' 소리가 있고, 코소리를 떼 자음 이외의 모든 자음은 목청을 떨지 아니하고 내는 맑은 소리 (淸音) 와, 목청을 떠는 음파가 따라 나오는 소리인 흐린 소리 (濁音) 가 있다.  또 터침소리 (破障音) 와 갈림소리 (摩擦音) 와 터쳐 갈림소리 (破擦音) 에는 목청 터침소리 (聲帶破障音 “으<sup>20</sup>, ?”) 가 따라 나오는 된소리 (硬音) 가 있고, 또 목청 갈림 소리 (聲帶摩擦音 “ㅎ, h”) 가 따라 나오는 거센 소리 (激音) 가 있고, 열어 놓은 목청에서 흘러 나오는 공기로 일으키는 예사 소리 (平音) 가 있다.</p> <p>5. 子音의發音의理致  子音は發音器官、すなわち唇や舌や声帶や口蓋垂をくっつけて破裂させたり、狭めたり、摩擦させたり、引っかけたり離したりして發音する音である。  そして、子音は作用に応じて破裂音、摩擦音、ふるえ音、破擦音の4種類があり、破裂する時は鼻の穴を通して響く鼻音があり、鼻音を帯びた子音以外のすべての子音は声帶を震わせないで發音する無聲音と、声帶を震わせる音波に伴って出てくる音である有聲音がある。  また、破裂音と摩擦音と破擦音には声帶破擦音 (ㅇ, ?) が伴って出てくる硬音 (濃音) があり、また声帶摩擦音 (ㅎ, h) が伴って出てくる激音があり、開放した声帶から流れ出てくる平音がある。</p>	<p>5. 닿소로 (子音) 發生의 理 (가) . 子音은 發音 機關 곧 입술이나 혀나 목청 (聲帶) 이나 목젖을 붙이어서 터치거나 좁혀서 갈거나 붙이었다가 떼었다가 하여 나는 소리 다. 그리하여 子音은 그 作用에 依하여 破障音, 摩擦音, 顫動音, 破障 摩擦音 네 가지가 있고, 破障 同時에 콧구멍을 통하여 울리는 鼻音이 있고, 모든 子音은 목청을 떨지 아니하고 내는 淸音 밖에 목청을 떠는 音波를 同伴하여 내는 濁音이 있고, 破障音과 摩擦音에는 聲帶 破障音을 同伴하여 내는 硬音이 있고, 聲帶 摩擦音을 同伴하여 내는 激音이 있고, 聲帶 開放 氣流로 내는 平音이 있다. 아래에 朝鮮語의 子音 (닿소리) 을 說明한다.</p> <p>5. 子音의發音의理  子音は發音器官、すなわち唇や舌や声帶や口蓋垂をくっつけて破裂させたり、狭めたり、摩擦させたり、引っかけたり離したりして發音する音である。そして、子音は作用に応じて破裂音、摩擦音、ふるえ音、破擦音の4種類があり、破裂と同時に鼻の穴を通して響く鼻音があり、すべての子音は声帶を震わせないで發音する無聲音のほか、声帶を震わせる音波を伴って發音する有聲音があり、破裂音と摩擦音には声帶破擦音を伴って發音する硬音 (濃音) があり、声帶摩擦音を伴って發音される激音があり、声帶開放音氣流で發音される平音がある。以下、朝鮮語の子音を説明する。</p>

5-16.

「平壤版」では、鼻音口のような共鳴音を「反響音」、破裂音ㅍ、ㅌ、ㅍ、ㅌを「瞬間音」と呼んで、發音持続時間の違いに言及している。

「平壤版」(1949) 29頁9行目～30頁5行目	「ソウル版」(1947) 21頁17行目から22頁3行目
<p>“ㄱ”는 떠는 목청의 음파 (音波) 를 받아 나오는 공기가 한쪽으로는 막힌 자리를 터치면서, 다른 한쪽으로는 목젖을 아래로 숙이여, 코' 구멍</p>	<p>ㄱ은 떠는 목청의 音波를 받아 나오는 空氣가 한 쪽으로는 막힌 자리를 터치는 同時에 목젖을 아래로 숙이여 콧구멍을 통하여 空氣를 내어 보</p>

<p>을 통하는 공기가 그 안에 울리어 나는 코' 소리이며, 흐린소리이다.</p>	<p>내는鼻音(코소리)이며濁音(흐린소리)이다.</p>
<p>“ㄱ”는 울림소리(反響音)로 숨을 이어서 끌어갈 수가 있으나 “ㄷ, ㅃ, ㅈ”는 터침소리이므로 순간음(瞬間音)이다.</p>	<p>“ㄱ”는 울림소리(反響音)로 숨을 이어서 끌어갈 수가 있으나 “ㄷ, ㅃ, ㅈ”는 터침소리이므로 순간음(瞬間音)이다.</p>
<p>“ㄱ”は震える声帯の音波を受けて出てくる空気が、一方では閉ざされた位置を破裂させながら、他の一方では口蓋垂を下に垂らして鼻の穴を通して空気がその中で共鳴して出る鼻音であり、有声音である。</p>	<p>ㄱは震える声帯の音波を受けて出てくる空気が、一方では閉ざされた位置を破裂させると同時に口蓋垂を下に垂らして鼻の穴を通して空気を送り出す鼻音であり、有声音である。</p>
<p>“ㄱ”は反響音で、息を持続させることができるが、“ㄷ, ㅃ, ㅈ”は破裂音なので、瞬間音である。</p>	

5-17.

「平壤版」では、有声音ㄴと無声音・破裂音・瞬間音であるㄷ, ㅃ, ㅈとの発音持続時間の違いに言及している。

「平壤版」(1949) 30頁14行目～31頁1行目	「ソウル版」(1947) (1947)21頁17行目～22頁3行目
<p>ㄴ는 떠는 목청의 음파를 받아 나오는 공기 [가<sup>21)</sup>] , 한쪽으로는 막힌 자리를 터치면서 목젓을 아래로 숙이여 코' 구멍을 통하는 공기가 그 안에 울리어 나오는 코' 소리이며, 흐린 소리이다.</p>	<p>ㄴ는 떠는 목청의 音波를 받아 나오는 空氣가 한 쪽으로는 막힌 자리를 터치는 同時に 목젓을 아래로 숙이여 코' 구멍을 통하여 空氣를 내어 보내는 鼻音(코소리)이며 濁音(흐린소리)이다.</p>
<p>ㄴ는 울림 소리이므로 오래 끝나갈 수가 있으나, ㄷ, ㅃ, ㅈ는 숨으로 터치여 내는 터침 소리이므로 순간음이다.</p>	
<p>ㄴは震える声帯の音波を受けて出てくる空気が、一方では閉ざされた位置で破裂しながら、口蓋垂を下に垂らして、鼻の穴を通して空気がその中で共鳴して出てくる鼻音であり、有声音である。</p>	<p>ㄴは震える声帯の音波を受けて出てくる空気が、一方では閉ざされた位置で破裂するとともに、口蓋垂を下に垂らして、鼻の穴を通して空気を送り出す鼻音であり、有声音である。</p>
<p>ㄴは有声音で長く持続させることができるが、ㄷ, ㅃ, ㅈは無声音で、破裂して出す破裂音なので、瞬間音である。</p>	

5-18.

音節末子音 /ŋ/ の表記において、「平壤版」では이응 (ㅇ) ではなく、옛이응 (ㆁ) を用いている。

「平壤版」(1949) 31頁6行目～7行目	「ソウル版」(1947) 23頁2行目～23頁3行目
<p>(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은 모두 여린 입청장(軟口蓋) 안쪽에 붙인 혀뿌리(舌根)를 터치는 소리이다. (3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은 모두 여린 입청장(軟口蓋) 안쪽에 붙인 혀뿌리(舌根)를 터치는 소리이다.</p>	<p>(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은 다 여린 입청장(軟口蓋) 안쪽에 붙인 혀뿌리(舌根)를 터치는 소리이다. (3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은 다 여린 입청장(軟口蓋) 안쪽에 붙인 혀뿌리(舌根)를 터치는 소리이다.</p>
<p>(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은, いずれも軟口蓋の奥の方にくっ付いた舌根を破裂させる音である。</p>	<p>(3) ㄱ, ㅋ, ㆁ 은, いずれも軟口蓋の奥の方にくっ付いた舌根を破裂させる音である。</p>

5-19.

「平壤版」では、スが平音であることも加筆している。

「平壤版」(1949) 33頁6行目～8行目	「ソウル版」(1947) 24頁7行目から24頁9行目
<p>스은 열린 목청에서 거침이 없이 나오는 공기 로 터치면서 갈아 내는 터치 갈림소리 (破擦音) 인데, 예사 소리이며, 맑은 소리이요; 스は開いた声帯から障害を受けないで出てくる 空気を破裂させながら摩擦させる破擦音であり、 平音であり、無声音である。</p>	<p>스은 열린 목청에서 거침이 없이 나오는 空氣 로 터치면서 갈아 내는 破障 摩擦音이며 清音이 요; 스は開いた声帯から障害を受けないで出てくる 空気を破裂させながら摩擦させる破擦音であり、 無声音である。</p>

5-20.

破擦音스, 쌍, ㅌの発音時の口の模型図に対する解説が「平壤版」に付されている。

「平壤版」(1949) 33頁15行目	「ソウル版」(1947) 24頁の第37図～第39図
<p>(혀가 이' 몸에 닿는 자리와 작용은 같음을 보임) (舌が歯茎に付く位置と作用は同じであることを示 す)</p>	<p>記述ナシ</p>

5-21.

後部歯茎でのふるえ音のㄹを「ソウル版」では「齶舌音」、「平壤版」では「顫動音<sup>せんどう</sup>」と呼び、「平壤版」では「舌が震える音」という説明を加筆している。また、「ソウル版」での説明「初声では用いられない」が、「平壤版」では「母音の間でだけ用いられる」と書き換えられているが、これは終声ではふるえ音ではなく、舌側音であることを考慮したためだろう。さらに、平音、有声音であることも加筆されている。

「平壤版」(1949) 34頁1行目～34頁5行目	「ソウル版」(1947) 25頁3行目～25頁8行目
<p>(6) ㄹ (혀끝 떠는 소리-顫舌音) 는 혀끝을 위' 이' 몸에서 한번 떨어 움직이는 소리이다. 이 소 리는 본래 조선 말에는 첫소리로 쓰이지 아니하 였으나, 이제는 서양 외래어 (外來語) 의 영향을 입어, 교육을 받은 사람은 첫소리에 도 잘낸다. 이 소리는 예사 소리이며, 흐린 소리이다. (6) ㄹ (舌先が震える音-ふるえ音) は、舌先を 上歯茎に一度震わせえて動かす音である。この音 は本来、朝鮮語では初声で用いられなかったが、 今では西洋外来語の影響を受けて、教育を受けた 人は初声でもうまく発音する。この音は平音であ り、有声音である。</p>	<p>(6) ㄹ은 齶舌音이다. 윗이와 윗잇몸에 혀끝을 한 번 흔들면서 뒤치어 대었다가 떼는 소리 다. 이 소리는 本來 朝鮮語에는 母音 사이에만 난다. 그러나 이제는 西洋 外來語의 影響을  입어 교육을 받은 사람은 첫 소리에 도 發音한다. 例를 들면 “라디오” 다. (6) ㄹ은 ふるえ音である。上歯と上歯茎に舌先を 一度揺らしながら裏返して当ててから外す音であ る。この音は本来、朝鮮語では母音の間でだけ現 れる。しかし、今では西洋外来語の影響を受け、 教育を受けた人は語頭音としても発音する。例え ば「ra-di-o」(ラジオ)である。</p>

5 - 22.

「ソウル版」では舌側音は「中声と終声にのみ現れる」、「平壤版」では「本来、初声では用いられない」となっていて、形式的には相互の記述の間に整合性がみられる。しかし、「中声」が母音に限られるとすれば、「ソウル版」の記述は理にかなわない。これは語頭の初声には舌側音が立たないことを指摘している限りの話で、例に挙げられた멀리, 골라, 들리는、それぞれ모르다, 고르다, 두르다を基本形とするㄹ変格用言であり、この活用形をも含めた議論であれば、「ソウル版」は「初声と終声にのみ現れる」と書かれるべきであったろう。「ソウル版」でも「平壤版」でも、西洋外来語の影響によって、「教育を受けた人」は初声でも舌側音を語頭でも発音すると書いているが、『朝鮮語文法』（1949年10月）の「語音論」26頁では、外来語「레닌」（レーニン）の語頭の文字をㄹではなく、新六字母のㄹで表記して、語頭の舌側音を表示しようとしている。また、「平壤版」ではㄹが平音、有声音であることを加筆している。

朝鮮語文研究会の『朝鮮語新綴字法』<sup>22)</sup>（1950年4月）第3章第4節（8）では、ㄹ変格用言に関して、「従来の“ㄹㄹ”（갈라, 갈랐다……）の代わりに字母ㄹを用いる。字母ㄹは舌側音 [l] である」として、新字母ㄹの導入を提起し、例えば、従来のㄹ変格用言가르다（分ける）は가ㄹ다と表記し、「가르니, 가르지」は「가ㄹ니, 가ㄹ지」、「갈라, 갈랐다, 갈리다」は「가ㄹ, 가ㄹ다, 가ㄹ다」と表記することにしていた。ここでいう「一」音の発音規則とは、「一」が弱母音であるため、その後に母音が続くと消失する現象を指摘したものである。これより先、朝鮮語文研究会が発表した解説「朝鮮語綴字法の基礎（2）」（『朝鮮語研究』第1巻第6号、1949年9月、75頁）でも「ひとつの形態素内の2つの母音の間で現れる舌側音はㄹと書く」とし、さらに「したがって、二つの形態素の間で現れる舌側音は音節別に別々に“ㄹㄹ”と書く」とし、『朝鮮語新綴字法』と同様の規定を行っていた。「ソウル版」の「ㄹㄹ」を「平壤版」で「ㄹ」と書き換えたのは、当時の新綴字法制定の趣旨に沿ったものだった。

「平壤版」（1949） 34頁6行目～34頁12行目	「ソウル版」（1947） 25頁9行目～25頁14行目
<p>(7) ㄹ는 혀 옆 같이 소리 (舌側摩擦音) 이다. 이 소리도 본래 조선 말에는 첫소리로는 쓰이지 아니한다. 그러나 이 소리도 ㄹ와 마찬가지로 교육을 받은 사람은 잘 낸다. 이 소리는 예사 소리이며, 호린 소리이다. (第46図～第48图 省略)</p>	<p>(7) ㄹ은 舌側音이다. 朝鮮語에는 中聲과 終聲에만 난다. 그런데 그表記法은 中聲에는 앞의 母音에는 ㄹ 받침을 받치고 뒤의 母音에는 ㄹ 初聲을 쓴다. 예를 들면 멀리, 골라, 들리, 그러나 받침에는 ㄹ 하나만 쓴다. 예를 들면 달, 술, 불. (第40图, 第41图 省略)</p>
<p>(7) ㄹは舌側摩擦音である。この音も本来、朝鮮語では初声では用いられない。しかし、この音も「ふるえ音の-熊谷注」ㄹと同様に、教育を受けた人はうまく発音する。この音は平音であり、有声音である。</p>	<p>(7) ㄹは舌側音である。朝鮮語では、中声と終声にのみ現れる。ところで、その表記法は中声には前の母音にはㄹパッチムを表記し、後ろの母音にはㄹ初声を書く。例えば、멀리, 골라, 들리. しかしパッチムにはㄹを一つだけ書く。例えば, 달, 술, 불.</p>

5-23.

「ソウル版」ではㅎ, ㅎ, ㅇの順だが、「平壤版」ではㅎ, ㅎ, ㅇの順に置き換えられている。また、「平壤版」で、ㅇとㅇは区別して用いるべきだとして、옛이음 (ㅇ) の復活使用を提起している。なお、「ソウル版」でも、/ŋ/音を明示するために、이음 (ㅇ) ではなく옛이음 (ㅇ) を用いている。「ソウル版」の「ㅇは初声では声帯振動音で、母音をつくる音素となる」という記述が「平壤版」版では削除されている。李相億 (1987: 188) はこの記述を批判して、「文字上のㅇが、必ず音素になると見たのは、文字の幻影に引きずられた結果である。現代音声学ではㅇ音が発音されない虚字とみており、ただ、中世朝鮮語を論ずる文脈ならば、[初声の一熊谷注] ㅇが [ŋ] という声帯振動音 (正確には有声喉頭摩擦音) であると言えるだろう」と指摘している。

「平壤版」(1949) 34頁12行目～35頁6行目	「ソウル版」(1947) 25頁15行目～26頁8行目
<p>(8) ㅎ, ㅎ, ㅇ은 모두 목청 소리 (聲帶音) 이다. ㅎ은 꼭 막은 목청을 터치는 소리이니, 된소리이며, 맑은 소리이요; ㅎ은 좁힌 목청을 갈아 내는 소리니, 거센 소리이며, 맑은 소리이요; ㅇ은 켜진 목청을 떠는 소리이니, 예사 소리이며, 흐린 소리이다. ㅎ은 이제 함경도와 경상도 사투리에 쓰인다. ㅎ을 들면 하니 (不), 허제 (何), 히 (此) (第49圖～第51圖 省略)</p> <p><b>【주의】</b> ㅇ와 ㅇ는 글자 모양이 비슷하므로 이제 서로 통하여 쓰나, 마땅히 분간하여야 될 것이다.</p>	<p>(8) ㅎ, ㅎ, ㅇ은 다 喉音 곧 목청소리다. 그러나 ㅎ은 목청을 좁히어 그 가장자리를 갈아 내는 소리니, 摩擦音이며 淸音이다. ㅎ은 닫힌 목청을 터치어 내는 소리니, 破障音이며 硬音이며 淸音이다. 이 소리는 咸鏡道 사투리와 慶尙道 사투리에 쓴다. 예를 들면 咸鏡道 말에 하니 (不), 허제 (何), 히 (此), 慶尙北道말에 하니 (不). ㅇ은 訓民正音에 喉音으로 한 子音이다. 그런데 이제 ㅎ과 ㅇ을 그 字形에 있어 ㅇ으로 통하여 쓴다. 곧 初聲에는 聲帶 振動音으로 母音을 만드는 音素가 되고 終聲에는 혀뿌리를 터치는 ㅁ소리가 된다.</p> <p>(第43圖～第45圖 省略)</p>
<p>(8) ㅎ, ㅎ, ㅇ은 이자음도 聲帶音 (聲門音) である。ㅎ은 이자음도 閉じた 聲帶를 破裂させる音なので、硬音 (濃音) であり、無聲音であり: ㅎ은 狭めた 聲帶를 摩擦して 發音する音なので、激音であり、無聲音であり: ㅇ은 緊張した 聲帶를 震わせる音なので、平音であり、濁音 (有聲音) である。ㅎ은 今日、咸鏡道と慶尙道の方言で用いられている。例えば、하니 (不), 허제 (何), 히 (此) (第49圖～第51圖 省略)</p> <p><b>【注意】</b> ㅇとㅇ은 文字の形が良く似ているので、今日、互いに区別しないで用いているが、当然区別すべきであろう。</p>	<p>(8) ㅎ, ㅎ, ㅇ은 이자음도 喉音、すなわち 聲帶音 (聲門音) である。しかし ㅎ은 聲帶를 狭めてその端を 摩擦して 發音する音なので、摩擦音であり、無聲音である。ㅎ은 閉じた 聲帶를 破裂させて 發音する音なので、破裂音であり、硬音であり、無聲音である。この音は 咸鏡道方言や 慶尙道方言で用いている。例えば、咸鏡道方言의 하니 (不), 허제 (何), 히 (此), 慶尙北道말에 하니 (不). ㅇ은 訓民正音で 喉音とした 子音である。ところが、今では ㅇと ㅇ을、その 字形において ㅇで 共通させて用いている。すなわち、初声では 聲帶振動音で、母音をつくる 音素となり、終声では 舌根を 破裂させる 鼻音となる。</p> <p>(第43圖～第45圖 省略)</p>

5-24.

「ソウル版」ではパッチムㅎが不破音ㄷに中和すると述べているが、「平壤版」では削除されている。ちなみに、「ソウル版」のようにパッチムㅎがㄷに中和すると説明した場合、낱고 [發音は나고] (産んで) のような激音化現象を説明できなくなる。

「平壤版」(1949) 35頁7行目~15頁	「ソウル版」(1947) 26頁9行目~27頁18行目																																																																																
<p>(9) 조선 말소리의 방침은 서양 말소리의 그것과는 달라서, 같은 발음 위치의 터침소리(破障音)는 그 자리에서 준비 자세(姿勢)로 붙이고 만다. 이와 같이 그 위치의 갈림소리(摩擦音)는 터침소리의 방침과 같이 붙이고 만다. 이것은 곧 혀를 갈림소리의 안정하지 못한 자세의 위치에서 터침소리의 안정한 자세의 위치로 보낸 까닭이다. 그러므로 이제 조선말 철자 법에 쓰이는 ㄷ ㅌ ㅍ ㅆ ㅈ ㅊ 여섯 받침은 은편(音便)으로 자리를 옮기어 ㄷ 자리에서 ㄷ 받침 같이 되고 만다. 예를 들면 언 알 앓 앓 앓 앓 은 다 “안”으로 발음이 되고 만다. 이와 마찬가지로 다른 같은 계통의 자리에서 나는 소리도 같은 원리로 발음이 된다. 곧 ㄱ ㅋ ㆁ 받침들도 그 터침소리 위치에서 붙이고 말므로, 다 같이 ㄱ와 같고, ㅍ, ㅆ는 ㅍ와 같다.</p>	<p>(9) 朝鮮 語音의 방침은 西洋 語音의 그것과는 달라서 같은 發音 位置에는 破障音은 그 자리에서 準備 姿勢로 固着시키고 만다. 이와 같이 그 位置의 摩擦音은 破障音의 방침과 같이 固着시키고 만다. 이것은 곧 혀를 摩擦音의 不安定한 姿勢의 位置에서 破障音의 安定한 姿勢의 位置로 보낸 까닭이다. 그러므로 이제 朝鮮語 綴字法에 쓰이는 ㄷ ㅌ ㅍ ㅆ ㅈ ㅊ 여섯 받침과 또 聲帶 摩擦音인 ㅎ은 音便으로 자리를 옮기어 ㄷ 位置에서 ㄷ 받침 같이 되고 만다. 예를 들면 언, 알, 앓, 앓, 앓, 앓, 앓 은 다 “안”으로 發音이 되고 만다. 이와 마찬가지로 다른 同一系統의 位置에서 나는 소리도 같은 原理로 發音이 되나니, ㄱ, ㅋ, ㆁ 받침들도 그 破障音 位置에서 固着시키고 말므로, 다 같이 ㄱ와 같고, ㅍ, ㅆ는 ㅍ와 같다.</p>																																																																																
<p>(9) 朝鮮語音의 패치ム(音節末子音)は、西洋語音のそれとは異なり、同じ發音位置の破裂音はその位置で準備姿勢で[舌が-熊谷注]くっ付いてしまう。このように、その位置の摩擦音は破裂音の패치ムと同様、くっ付いてしまう。これはつまり舌を摩擦音の安定しない姿勢の位置から破裂音の安定した姿勢の位置に移すからである。だから、いま朝鮮語綴字法で用いられているㄷ、ㅌ、ㅍ、ㅆ、ㅈ、ㅊの6つの패치ムは音便によって位置を移し、ㄷの位置でㄷ패치ムのようにになってしまう。例えば、안, 알, 앓, 앓, 앓, 앓, 앓はすべて“안”と發音されてしまう。これと同様に、他の同一系統の位置で發音する音も、同じ原理で發音される。すなわち、ㄱ, ㅋ, ㆁ패치ムも、その破裂音の位置でくっ付けてしまうので、いずれもㄱと同じで、ㅍ, ㅆはㅍと同じである。</p>	<p>(9.) 朝鮮語音의 패치ム(音節末子音)は、西洋語音のそれとは異なり、同じ發音位置では破裂音はその位置で固着させてしまう。このように、その位置の摩擦音は破裂音의 패치ムと同様、固着させてしまう。これはつまり、舌を摩擦音の不安定な姿勢の位置から破裂音の安定した姿勢の位置に移すからである。だから、いま朝鮮語綴字法で用いられているㄷ、ㅌ、ㅍ、ㅆ、ㅈ、ㅊの6つの패치ムと、また聲帶摩擦音である ㅎは音便によって位置を移しㄷの位置でㄷ패치ムのようにになってしまう。例えば、안, 알, 앓, 앓, 앓, 앓, 앓はすべて“안”と發音されてしまう。これと同様に、他の同一系統の位置で發音する音も、同じ原理で發音されるので、ㄱ, ㅋ, ㆁ패치ムも、その破裂音の位置で固まらせてしまうので、いずれもㄱと同じで、ㅍ, ㅆはㅍと同じである。</p>																																																																																
<p>이제 보기 쉽게 하기 위하여 일람표(一覽表)를 만들어 보면 다음과 같다. (ここで、見やすくするために一覽表をつくってみると、次の通りである。)</p>																																																																																	
<table border="1"> <thead> <tr> <th>發音</th> <th>位置</th> <th>聲帶振動有無</th> <th>氣流</th> <th>音種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ㄷ</td> <td>脣</td> <td>無(清)</td> <td>聲帶開放</td> <td>平音</td> </tr> <tr> <td>ㅌ</td> <td>〃</td> <td>無(〃)</td> <td>〃 破障</td> <td>硬音</td> </tr> <tr> <td>ㅍ</td> <td>〃</td> <td>無(〃)</td> <td>〃 摩擦</td> <td>激音</td> </tr> <tr> <td>ㅆ</td> <td>〃</td> <td>有(濁)</td> <td>〃 振動</td> <td>鼻音</td> </tr> <tr> <td>ㄷ</td> <td>舌端</td> <td>無(清)</td> <td>〃 開放</td> <td>平音</td> </tr> <tr> <td>ㅌ</td> <td>〃</td> <td>無(〃)</td> <td>〃 破障</td> <td>硬音</td> </tr> <tr> <td>ㅍ</td> <td>〃</td> <td>無(〃)</td> <td>〃 摩擦</td> <td>激音</td> </tr> <tr> <td>ㅆ</td> <td>〃</td> <td>有(濁)</td> <td>〃 振動</td> <td>鼻音</td> </tr> <tr> <td>ㄱ</td> <td>舌根</td> <td>無(清)</td> <td>〃 開放</td> <td>平音</td> </tr> <tr> <td>ㅋ</td> <td>〃</td> <td>〃(〃)</td> <td>〃 破障</td> <td>硬音</td> </tr> <tr> <td>ㆁ</td> <td>〃</td> <td>〃(〃)</td> <td>〃 摩擦</td> <td>激音</td> </tr> <tr> <td>ㅇ</td> <td>〃</td> <td>有(濁)</td> <td>〃 振動</td> <td>鼻音</td> </tr> <tr> <td>ㅅ</td> <td>舌端</td> <td>無(清)</td> <td>〃 開放</td> <td>平音</td> </tr> <tr> <td>ㅆ</td> <td>〃</td> <td>〃(〃)</td> <td>〃 破障</td> <td>硬音</td> </tr> <tr> <td>ㅈ</td> <td>〃</td> <td>〃(〃)</td> <td>〃 開放</td> <td>平音</td> </tr> </tbody> </table>		發音	位置	聲帶振動有無	氣流	音種	ㄷ	脣	無(清)	聲帶開放	平音	ㅌ	〃	無(〃)	〃 破障	硬音	ㅍ	〃	無(〃)	〃 摩擦	激音	ㅆ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音	ㄷ	舌端	無(清)	〃 開放	平音	ㅌ	〃	無(〃)	〃 破障	硬音	ㅍ	〃	無(〃)	〃 摩擦	激音	ㅆ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音	ㄱ	舌根	無(清)	〃 開放	平音	ㅋ	〃	〃(〃)	〃 破障	硬音	ㆁ	〃	〃(〃)	〃 摩擦	激音	ㅇ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音	ㅅ	舌端	無(清)	〃 開放	平音	ㅆ	〃	〃(〃)	〃 破障	硬音	ㅈ	〃	〃(〃)	〃 開放	平音
發音	位置	聲帶振動有無	氣流	音種																																																																													
ㄷ	脣	無(清)	聲帶開放	平音																																																																													
ㅌ	〃	無(〃)	〃 破障	硬音																																																																													
ㅍ	〃	無(〃)	〃 摩擦	激音																																																																													
ㅆ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音																																																																													
ㄷ	舌端	無(清)	〃 開放	平音																																																																													
ㅌ	〃	無(〃)	〃 破障	硬音																																																																													
ㅍ	〃	無(〃)	〃 摩擦	激音																																																																													
ㅆ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音																																																																													
ㄱ	舌根	無(清)	〃 開放	平音																																																																													
ㅋ	〃	〃(〃)	〃 破障	硬音																																																																													
ㆁ	〃	〃(〃)	〃 摩擦	激音																																																																													
ㅇ	〃	有(濁)	〃 振動	鼻音																																																																													
ㅅ	舌端	無(清)	〃 開放	平音																																																																													
ㅆ	〃	〃(〃)	〃 破障	硬音																																																																													
ㅈ	〃	〃(〃)	〃 開放	平音																																																																													



ㄷ	ㄱ	ㄱ (ㄱ)	ㄱ 破障	硬音
ㅌ	ㅋ	ㅋ (ㅋ)	ㅋ 摩擦	激音
ㄷ	舌端顫動	有 (濁)	ㄷ 振動	平音
ㅌ	舌側摩擦	有 (ㄱ)	ㄷ 振動	平音
ㅇ	聲帶	無 (清)	ㄱ 破障	硬音
ㅎ	ㄱ	ㄱ (ㄱ)	ㅋ 摩擦	激音
ㅇ	ㄱ	有 (濁)	ㄷ 振動	平音

5-25.

「ソウル版」の「音の相関性」に関するたとえ話は、適切ではないと判断したためか、「平壤版」では削除されている。

<p>「平壤版」(1949) 37頁1行目~5行目</p> <p>에는, 서로 주고 받는 영향에서 제 본래의 성질이 변하는 일이 적지 아니하다. 우리말에 있어서의 그 여러가지 경우를 들어 보면 다음과 같다.</p> <p>II. 音の関連性</p> <p>いくつかの音が互いに隣り合わせになり、関連して発音される時は、互いに与えあう影響で、それ本来の性質が変わることが少なくない。朝鮮語におけるそのさまざまな場合を取り上げると、以下の通りである。</p>	<p>「ソウル版」(1947) 28頁1行目~29頁21行目</p> <p>럿이 서로 牽制하여 行動하는 것이 아주 다른 것처럼 소리도 제 하나만 날 때와 여럿이 서로 관계되어 날 때가 아주 다를 것은 환한 일이다.</p> <p>조선 말의 홀소리의 音價는 이미 위에 말하였거니와, 이제는 그 소리들이 서로 만날 때에 어떻게 되는 것을 말하러 한다.</p> <p>二. 音の相関性</p> <p>あたかも人が一人で自由に行動することと、何人が互いに牽制して行動することとは非常に異なるように、音もそれ一つだけで発音する時と、いくつかが互いに関係して発音される時とは非常に異なることは、明らかなことである。</p>
---	---

5-26.

「ソウル版」では、連音の具体例を説明するために、3通りの語構成に分けて比較的詳しく解説している。「平壤版」では、「ソウル版」の「(2) 自立語がただ結合したり、あるいは綜合品詞(語結合)になったりする時」に起こる発音現象を「連音」とは見ず、これを「絶音」の項目に移して解説している。

また、「ソウル版」、「平壤版」ともに、形態主義表記された音節を「言語音節」、実際に発音される音節を「発音音節」という用語を用いて説明している。「ソウル版」で英語、ドイツ語、フランス語を例に挙げて行った連音の解説は、「平壤版」ではすべて削除されている。

<p>「平壤版」(1949) 37頁6行目~19行目</p> <p>1. 소리의 이음 (連音)</p> <p>소리의 이음이라 함은 앞의 음절의 받침이 바로 그 다음에 오는 모음으로 시작하는 음절에 내려와 붙어서, 새 음절을 이루는 동시에, 그 앞의 음절도 본래 받침을 잃었으므로 새 음절을 이루게 된다. 이것은 두가지 경우가 있다. 첫째는 주</p>	<p>「ソウル版」(1947) 28頁9行目~29頁21行目</p> <p>1. 소리의 이음 (連音)</p> <p>받침의 넘어감이라 함은 한 音節의 받침이 바로 그 다음에 오는 母音 앞에 붙어서 한 새 音節을 이루는 것을 말하는 것이다.</p> <p>音節은 言語 音節과 發音 音節이 있나니, 前者는 語源, 語根, 語幹, 語尾, 單語等を 밝히는 綴字</p>
--	--

중적(主從的) 관계로 된 말이요, 둘째는 한' 자가 종합된 말이다.

음절에는 언어 음절(言語音節)과 발음 음절(發音音節)이 있다. 앞의 것은 어원(語源), 어근(語根), 어간(語幹), 어미(語尾), 단어(單語) 등을 밝히는 철자의 규정으로 된 기사법(記寫法)이요, 뒤의 것은 말할 때에 실제로 내는 발음법(發音法)이다. 이것은 발음 생리(發音生理)의 자연 법칙이다. 그러므로 어느 민족의 말에나 다 있는 현상이다.

- (1) 주중(主從) 관계로 된 말  
(32例省略)
- (2) 한' 자가 종합된 말  
(20例省略)

### 1. 音の連音

音の連音というのは、前の音節のパッチムが、すぐその後にくる母音で始まる音節に移行して結合し、新たな音節を形成するとともに、その前の音節も本来のパッチムを失ったので、新たな音節を形成することになる。これは、2つの場合がある。その一つは主從的關係となった語であり、もう一つは漢字語素が結合した語である。

音節には言語音節と發音音節がある。前者は語源、語根、語幹、語尾、單語を明らかにする綴字の規定からなる書写法であり、後者は話す時、実際に發音される發音法である。これは發音生理の自然法則である。それゆえどの民族の言葉にもすべて存在する現象である。

- (1) 主從關係からなることば  
(32例省略)

의 規定으로 된 것이요, 後者は 글 읽거나 말할 때에 言語 音節을 잇달아 내는 實際 發音에서 생긴 音節이다. 이것은 發音 生理의 自然 法則이므로 어느 겨레의 말에나 다 있는 現象이다. 이제 보기를 들면 英語에 Numbering(言語音節은 남버링, 發音音節은 남버링), Damper(言. 댄프 어, 發. 댄퍼), Thankyou(言. 댕크 유, 發. 댕큐), 獨逸語에 Gruendung(言. 그윈드 옹, 發. 그윈둥), Hinaus(言. 힌아우쓰, 發. 히나우쓰), Ist er(言. 이스트 에르, 發. 이스테르) 佛語에 Mon ami(言. 몬 아미, 發. 모나미), Sansabri(言. 산아브리, 發. 상사브리), Il est ici(言. 일 에스트 이시, 發. 일레티시).

이제 조선 말의 連音 法則을 말하면, 세 가지 境遇가 있다. (1) 原詞와 토와의 關係나 또는 語幹과 補助 語幹과의 關係와 같이 으뜸에 딸리어 쓰이므로 제 본 소리를 각각 가지려고 애쓰지 아니하는 것이 있고, (2) 獨立한 資格을 가지고 만난 品詞들이 제 各各 本 소리를 바꾸지 아니하려고 하는 것이니, 만일 받침이 그 다음에 오는 母音으로 넘어가서 새 音節을 이루므로 本音價가 너무 달라서 뜻이 흐리게 되는 것을 피하려고 代表 音價로써 내는 綜合 品詞나 各 單語들이 있고, (3) 漢字語나, 漢字 綴 스스로는 다 獨立한 單語이나 조선 말에서는 單語의 資格이 없으므로 漢字 綜合語가 된 때에는 純 조선 말의 경우와 같이 各字가 제 音價를 바꾸지 아니하려는 絶音 現狀<sup>23)</sup>이 | ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ 앞에서는 없고, 그대로 連音이 된다. 위에 말한 세 가지의 實例는 다음과 같다.

- (1) 으뜸과 받침의 관계로 된 말.  
(36例省略)
- (2) 獨立한 單語가 그냥 만나거나 혹은 綜合 品詞가 될 때.  
(9例省略)
- (3) 漢字音의 綜合할 때.  
(20例省略)

### 1. 音の連音

連音(音の移行)というのは、ある音節のパッチムがすぐ後にくる母音の前について、ひとつ의 新たな音節を形成することを意味するものである。

音節は言語音節と發音音節があるが、前者は語源、語根、語幹、語尾、單語などを明らかにする綴字の規定からなるものであり、後者は文を読んだり話したり할 때에 言語의 音節을 續けて 發音する 實際의 發音で 生じた 音節である。これは 發音生理의 自然法則なので、どの民族も ことばにも、すべて 見られる 現象である。ここで 例を あげれば、英語の Numbering(言語音節은 남버링, 發音音節은 남버링), Damper(言. 댄프 어 [tɛm-phu ʌ], 發. 댄퍼 [tɛm-phɔ]), Thankyou(言. 댕크 유 [tɛŋ-khu ju] 發. 댕큐 [tɛŋ-khu]), ドイツ語의 Gruendung(言. 그윈드 옹 [ku-rin-du ŋ], 發. 그윈둥 [ku-rin-

(2) 漢字が結合したことは  
(20例省略)

duŋ]), Hinaus (言. 힌아우쓰 [hin-u-s'w], 発. 히나우쓰 [hi-na-u-s'w]), Ist er (言. 이스트에르 [i-sw-thuu e-ru], 発. 이스트에르 [i-sw-the-ru]), フランス語の Mon ami (言. 몬아미 [mon a-mi], 発. 모나미 [mo-na-mi]), Sans abri (言. 산아브리 [san-a-buu-ri], 発. 상사브리 [san-sa-buu-ri]), Il est ici (言. 일애스트이시 [il ε-su-tw i-fi], 発. 일래티시 [il-ε-thi-fi]).

さて、朝鮮語の連音法則について言うならば、3種類の場合がある。(1) 原詞と文法形態素(투)との関係や、または語幹と補助語幹との関係のように、自立形態素(으뜸)に付随して用いられるので、それ本来の音をそれぞれ持とうと努めないものがあり、(2) 独立した資格を持って接した自立語(「品詞」)が、それぞれ本来の音(本소리)を変えないようにしようとするものなので、もし、パッチムがその後に続く母音と結合して新たな音節をなすので、もともとの音価(「本音価」)があまりにも異なってしまって、意味があやふやになることを避けようとして、代表音で発音する語結合(「総合品詞」)やそれぞれの単語があり、(3) 漢字語だが、漢字それみずからはすべて独立した単語だが、朝鮮語では単語の資格がないので、漢字の語素による語結合(「漢字総合語」)となったときは、朝鮮固有語の場合と同様に、各文字がそれ本来の音価を変えないようにしようとする絶音現象がㄱ、ㄷ、ㅂ、ㅃ、ㅅの前では生じず、そのまま連音される。上に述べた3種類の実例は以下の通りである。

- (1) 自立形態素(으뜸)と依存形態素(붙음)の関係からなる語 (36例省略)
- (2) 自立語がただ結合したり、あるいは総合品詞(語結合)になったりする時。 (9例省略)
- (3) 漢字語素が結合する時。 (20例省略)

## 5-27.

絶音の表記法として、「平壤版」では「その音を十分に表そうとすれば、声帯を閉じてから破裂させて出す声帯破裂音ㅁを用いるのが正しい」と主張しつつも、朝鮮語文研究会では絶音符「」を付すことに決めたことを述べ、「これはこの問題に対する、もっとも成功的な解決となる」としている。ここでいう朝鮮語文研究会の決定とは、1948年1月15日に発表された綴字法を指したものだと思われる<sup>24)</sup>。この綴字法では、ㅁはㄷ다のような入変則用音で、ㄷに替えて用いる新六字母の一つとされたため、李克魯はㅁを絶音表記として使用しようとする私案を撤回したと見ることができるだろう。ちなみに、朝鮮語文研究会の綴字法が設定した42個の朝鮮語字母の中には、ㅁや本稿5-21でも触れたㅁも含まれていた。

絶音符は、複合語で生じる濃音化現象のみならず、いわゆる「n音挿入規則」と呼ばれる現象にも対応させた発音表記手段である。これは『朝鮮語新綴字法』で採用され、1954年に制定

された『朝鮮語綴字法』でも「サイピョ(사이표)」と名称を変えて採用され、形態音素主義表記を徹底させる朝鮮民主主義人民共和国における綴字法の重要な根幹部分をなしていた。「朝鮮語規範集」(1966年)で「사이피ョ」が廃止された際も、一部の語における例外的なケースを除いて、「中間のハ」(사이시옷)が復活することはなかった。「平壤版」では訓民正音の絶音表記法や「中間のハ」など、従来の絶音表記法は合理的ではないと主張している。なお、「ソウル版」では表音主義表記法の問題点を指摘しているが、この部分は「平壤版」では削除されている。

「平壤版」(1949) 40頁18行目~42頁2行目	「ソウル版」(1947) 38頁3行目~40頁12行目
<p>2. 소리의 끊음 (絶音)                  독립한 품사들이 모여서 종합 품사가 되거나, 혹은 두 단 품사가 그냥 앞뒤에 있어 곧 잇달아 읽을 때에 각 품사가 제 음가를 변하지 아니하려고 애쓰므로 앞의 소리가 흐린 소리이면 (모든 모음과 ㄹㅇㄹ) 그 소리를 갑자기 끊어서, 그 소리가 다음 소리에 영향을 주지 못하도록 하는 것을 소리의 절음 (絶音) 이라 한다.                  내는 소리를 갑자기 끊는 데에는 받침 (子音終聲) 이면, 그 소리가 나는 자리를 힘써 막는 동시에 목청 (聲帶) 을 막고, 모음이면 목청을 막는 동시에, 또 편의를 좇아 그 다음에 날 자음의 영향을 받아서, 그 자음이 앞의 모음의 받침이 되어서 그 자리에서도 막아 끊게 된다.                  이 소리의 끊음을 중간 ㅏ 이라 하여 ㅏ으로써 중간에 적기도 하였고, 또는 ㅏ 받침을 쓰기도 하였고, 훈민정음에는 흐린 소리의 받침 밑에는 그 받침 소리와 같은 갈래의 음의 터침소리 (破障音) 를 썼다. 즉 ㅇ 밑에는 ㄱ, ㄴ 밑에는 ㄷ, ㄹ 밑에는 ㅂ, ㅇ 밑에는 ㅎ를 썼다. 예를 들면;</p>	<p>4. 소리의 끊음 (絶音)                  獨立한 品詞들이 모여서 綜合 品詞가 되거나, 혹은 두 단 품사가 그냥 前後하여 곧 잇달아 읽게 될 때에 各 品詞가 제 音價를 變하러 하므로 앞에 소리가濁音이면 (모든 母音과 ㄹ, ㄴ, ㅇ, ㄹ) 그 소리를 갑자기 끊어서 그 소리가 다음 소리에 影響을 주지 못하도록 하는 것을 絶音이라 한다. 내는 소리를 갑자기 끊는 때에는 子音 終聲이며, 그 소리가 나는 자리를 힘써 막는 同時에 聲門 (목청) 을 막고 母音이면 聲門을 막는 同時에 또 便宜를 좇아 그 다음에 날 子音의 影響을 받아서 그 子音이 앞 母音의 받침이 되어서 그 자리에서도 막아 끊게 된다.                  이 絶音을 우리가 中間 ㅏ으로써 적어 왔고 이 제는 받침이 없는 말에는 그 끝 音節에 ㅏ 받침을 쓴다. 이제까지 이 絶音 結果로 두 가지 發音 變化가 생기게 된나니, 첫째는 絶音 뒤에 오는 닿소리가 平音이면 그것이 된소리 (硬音) 처럼 나고, 둘째는 ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ 면 ㄹ 받침 밑에는 그것을 닮아서 ㄹ 蓋音化한 舌側音 ㄹ이 된나고, ㄹ 받침 밖의 모든 받침 밑에는 ㄹ 蓋音化한 ㄴ이 된나게 된다. 그 까닭은 다음과 같다.                  위에 이미 말한 바와 같이 絶音할 때에는 聲門을 막는다. 그러므로 숨을 통하지 못한 다음에 또 혀끝 狹窄音 ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ 音을 내려 하매 숨을 입으로 잘 通할 수가 없어서 콧구멍을 열게 되는 것은 生理의 自然이다. 그런데 혀 位置가 ㄹ 蓋音 ㄴ 내는 자리에 있고, 또 ㄴ 낼 때와 같이 콧구멍이 열렸으니, ㄹ 蓋音化한 ㄴ이 날 것은 必然한 일이다. 보기를 들면,                  (43例省略)</p>
<p>형ㅏ쫘 (洪ㅏ字)      군ㅏ쫘 (君ㅏ字)                  밥ㅏ쫘 (單ㅏ字)      닭ㅏ쫘 (雞ㅏ字)                  썰ㅏ쫘 (快ㅏ字)</p>	
<p>들이 곧 그것이다.                  그러나 이상에 말한 여러가지 절음 표기법 (絶音表記法) 은 합리적이라고 할 수 없다. 이 소리를 제대로 적으려면, 목청을 단았다가 터뜨리려 내는 목청 터침소리 (聲門破障音) ㅎ를 쓰는 것이 옳다. 그러나 이것을 간단히 표기하기 위하여, 앞의 음절 오른쪽 어깨에 '표'를 찍기로 조선어문 연구회에서는 작정하였다. 이것은 이 문제에 대한 가장 성공적인 해결로 된다.</p>	
	<p>이 위에 벌린 바 實際 發音 現象을 觀察하였다. 그러나 우리가 글을 發音되는 대로만 쓰자는 것이 아니다. 소리 나는 경우 그대로만 쓴다면 이것은 文字가 아니라, 萬國 音聲 記號와 같은 單純한 소리만 적은 符號에 지나지 아니한다. 文字란 것은 말의 소리를 적는 同時에 또 語源의 이나 語法的 關係에서 생긴 뜻을 돌보아 綴字法을 定하게 된다. 소리를 精密히 적음으로 語源이나 語法的 統一性을 깨뜨리거나 語源이나 語法을 너무 重하게 여김으로 記寫된 소리가 音理的 說明이 되지 아니하는 것은 다 不合理한 것이</p>

2. 音の断絶 (絶音)

自立形態素が集まって語結合 (「総合品詞」) になったり、あるいは、2つの異なる語がただ前後にあって、そのまま続けて読んだりするとき、それぞれの語がその音価を変えないようにしよう努めるので、前の音が有声音ならば (すべての母音とㄱ, ㄴ, ㄷ), その音を速やかに切って、その音が次の音に影響を及ぼさないようにするのを、音の絶音という。

発音する音を速やかに切るにあたっては、子音の終声であれば、その音が発音される位置を努めて閉ざすとともに声帯を閉じ、母音であれば声帯を閉じるとともに、また、発音しやすいように、その次に発音される子音の影響をうけて、その子音の前の母音の終声となり、その位置でも閉ざして断絶することになる。

この音の断絶を中間のハといい、ハを用いて中間に書いたりしたり、また、ハパッチムを書いたりもし、訓民正音では有声音の終声の後には、その終声音と同種の音の破裂音を書いたりした。すなわち、ㅇの後にはㅍ, ㄴの後にはㅅ, ㅇの後にはㅁを書いた。たとえば;

홍ㅍㄱ (洪ㅍㄱ)	군ㄴㄱ (君ㄴㄱ)
맘ㅍㄱ (覃ㅍㄱ)	쑤ㅍㄱ (叫ㅍㄱ)
쾌ㅇㄱ (快ㅇㄱ)	

しかし、以上で述べたいろいろな絶音の表記法は合理的だとは言えない。その音を十分に表そうとすれば、声帯を閉じてから破裂させて出す声帯破裂音ㅇを用いるのが正しい。しかし、簡単に表記するため、音節の右側の肩に「」の符号を付すことに、朝鮮語文研究会は決めた。これはこの問題に対する、もっとも成功的な解決となる。

다. 그러므로 合理的 綴字法은 表音과 表意가 서로 調和를 잃지 아니하는 데에 있는 것이다.

2. 音の断絶 (絶音)

自立形態素が集まって語結合 (「総合品詞」) になったり、あるいは2つの異なる語がただ前後して、つまり続けて読まれる時、それぞれの語がその音価をなるべく変えないようにしたりするので、前の音が有声音ならば (すべての母音とㄱ, ㄴ, ㄷ), その音が次の音に影響を及ぼさないようにすることを絶音という。発音する音を急に切る時は子音終声であれば、その音が発音される位置を努めて閉ざすとともに声門を閉じ、母音であれば声門を閉じるとともに、発音しやすいように、その次に発音される子音の影響をうけて、その子音が前の母音のパッチムとなり、その位置でも閉ざして断絶するようになる。

この絶音を私たちは中間のハを用いて書いてきたが、今はパッチムのない語には、その末音節にハパッチムを書く。これまで、この絶音の結果として2通りの発音変化が生じるようになったが、その一つは絶音の後にくる子音が平音ならば、それが硬音 (濃音) のように発音され、もう一つは ㅍ, ㅌ, ㅋ, ㆁ, ㆁなら、ㄷパッチムのあとには、それに同化して口蓋音化した舌側音ㅌが加わり、ㄷパッチム以外のすべてのパッチムの後には、口蓋音化したㄷが加わることになる。その理由は次の通りである。

上ですでに述べたように、絶音をする時は声門を閉じる。したがって、息が通過できないようにしたあと、また舌先狭窄音である ㅍ, ㅌ, ㅋ, ㆁ, ㆁ 音を発音しようとするので、息を口からうまく出すことができず、鼻の穴を開けるようになるのは、生理の自然である。ところで、舌の位置が口蓋音ㄷを発音する位置にあり、またㄷを発音する時のように鼻の穴が開くので、口蓋音化したㄷが発音されるのは必然的なことである。例を上げれば、

(43 例省略)

この上に並べたように、実際の発音現象を観察した。しかし、私たちが文字を発音される通りにだけ書こうというのではない。発音する場合のままに書いたならば、それは文字ではなく、国際音声記号のような単なる音だけを書いた符号に過ぎない。文字というものは、言葉の音を書くと同時に、また語源的や文法的関係から生じた意味を考慮して、綴字法を定めることになる。音を精密に記述することによって、語源や文法の統一性を破壊したり、語源や文法を重視しすぎて、書き写された音が音理的説明に副わないのは、すべて不合理なことである。それゆえ、理にかなった綴字法は、表音と表意が互いに調和を失わないところにあるのである。

5 - 28.

「ソウル版」でパッチムを発音する際の2段階の動作に関する説明や、「ソウル版」本文の最末尾に書かれた /n/ 音の口蓋音化に関する説明は、「平壤版」では削除されている。

「平壤版」（1949）50頁7行目～21行目	「ソウル版」（1947）46頁22行目～47頁15行目
<p>5 우리말 받침법의 특징. 조선 말소리의 받침법은 서양 말소리의 그것과는 달라서, 같은 발음 위치에는 터침 소리는 그 자리에서 준비 자세 (姿勢) 로 붙이고 만다. 이것은 곧 혀를 갈림 소리의 불안정한 자세의 위치에서, 터침소리의 안정한 자세의 위치로 보낸 까닭이다. 그러므로 이제 조선말 철자법에 쓰이는 ㄱ ㅋ ㆁ ㅃ ㅅ ㅈ의 여섯 받침과 또 목청 갈림소리 ㅎ과 목청 터침소리 ㆁ은 음편으로 자리를 옮기어, ㄱ 위치에서 ㄷ 받침과 같이 내고 만다.</p> <p>례를 들면: “안 알 앓 앓 앓 앓 앓 앙 양” 은 다 ”안” 으로 발음이 되고 만다. 이와 마찬가지로, 다른 같은 계통의 위치에서 나는 소리도 같은 원리로 발음이다. ㄱ ㅋ ㆁ 받침들도 그 터침 소리의 위치에서 고착시키고 말므로, 다 같이 ㄱ과 같고, ㅃ ㅅ은 ㅃ과 같다.</p>	<p>받침이란 것은 한 소리덩이 (音節) 의 끝에 붙은 닿소리다. 조선 말의 子音이 첫소리 (初聲) 에서와 끝소리 (終聲) 곧 받침에서 나는 法이 서로 다른 것은 音便과 習慣이다. 소리를 내는 때에는 두 가지 階段이 있나니, 첫째는 소리내는 자리를 고루어 만드는 準備요, 둘째는 動作을 取하여 소리를 完成하는 것이다. 조선 말에 받침은 그 소리의 準備 階段에 그치고 만다. 그러므로 같은 자리에서 나는 닿소리로 그 내는 것이 비슷하거나 또는 生理的 連鎖關係가 있으면 자리를 옮기어서 다 한가지 소리로 내되 摩擦音이나 振動音과 같이 자리가 安定치 못한 狀態에 있는 것은 다 安定한 자리로 가려고 벌어진 자리를 다 붙이게 된다. 그러므로, 摩擦音은 破障音으로, 顛舌音 (ㄷ) 은 舌側音 (ㄷ) 으로 變하고 만다. 그래서, ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㅃ, ㅅ, ㅈ, ㅅ, ㅈ, ㅎ (激音化外) 들은 다 같이 받침에는 ㄱ 소리로 내고, ㅃ, ㅅ은 다 ㅃ으로 내고, ㄱ, ㅋ, ㆁ은 다 ㄱ으로 내고, ㄷ는 ㅅ으로 내고 만다.</p> <p>조선 말에도 口蓋音化하여 읽는 子音이 상당히 많다. 그 중에도 ㄱ 같은 것은 다른 字들 대신하여 쓸 수도 없이 많이 實用하게 된다. 그러나 이것을 單 소리로 잡을 必要가 없는 것은 그것이 半母音   (J) 와 連發하므로 自然한 現象인 까닭이다.</p>
<p>5. 朝鮮語의 패치ム法の特徴 朝鮮語音의 패치ム法は、西洋の語音の場合とは異なり、同じ發音位置では破障音(破裂音)はその位置での準備姿勢をとって [舌を一熊谷注] をくっつけてしまう。これはすなわち、舌を摩擦音の不安定な姿勢の位置から破裂音の安定した姿勢の位置に送るためである。それゆえ、いま朝鮮語綴字法で用いられている ㄱ ㅋ ㆁ ㅃ ㅅ ㅈ の6つの 패치ムと、声帶摩擦音 ㅎ と 声門破裂音 ㆁ は、音便によって位置を移動して、ㄱ の位置で ㄷ 패치ムのように發音してしまう。</p> <p>たとえば、“안 알 앓 앓 앓 앓 앓 앙 양” は、すべて ”안” と發音されてしまう。これと同様に、ほかの同系統の位置で發音される音も同じ原理で發音される。すなわち、ㄱ ㅋ ㆁ 패치ムもその破裂音の位置で固着させてしまうので、すべて同様に ㄱ とおなじであり、ㅃ ㅅ は ㅃ と同じである。</p>	<p>패치ムというのは、一つの音節の最後に付く子音のことである。朝鮮語の子音が初声においてと、終声すなわち패치ムで發音される方法が互いに異なるのは、音便と習慣である。音を發音する時、2つの段階があるが、最初は發音する位置を選んで整える準備であり、二番目は動作をとって音を完成させることである。朝鮮語の패치ムは、その音の準備段階で終わってしまう。それゆえ、同じ位置で發音される子音で、その發音する行為が良く似ていたり、または生理的連鎖關係があつたりすれば、位置を移してすべて同じ音を出すが、摩擦音や振動音のように位置が安定していない状態にあるものは、すべて安定した位置に向かおうとして、[舌と調音点の間の一熊谷注] 開いた場所を完全にくっ付けるようになる。それゆえ、摩擦音は破障音(破裂音)に、はじき音(ㄷ)は舌側音(ㄷ)に変わってしまう。だから、ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㅃ, ㅅ, ㅈ, ㅅ, ㅈ, ㅎ (激音化する場合以外) は、すべて패치ムではㄱ音で發音し、ㅃ, ㅅはともに、ㅃで發音し、ㄱ, ㅋ, ㆁはともにㄱで發音し、ㄷはㅅで發音してしまう。</p>

朝鮮語にも口蓋音化して読む子音がかなり多い。その中でもこのようなものは、他の字に変えて書くこともできないまま、実際に多く用いられる。しかし、これを別の音ととらえる必要がないのは、それが半母音 ɨ (j) と共に発音されるので、自然な現象だからである。

## 6. 綴字法、語彙・表現の特徴

### 6-1. 綴字法上の特徴

#### 6-1-1. 絶音符の使用

「平壤版」(1949)では、朝鮮語文研究会が制定した綴字法に準拠したと思われる絶音符が、全面的に用いられている。また、「平壤版」では漢字はすべて括弧で括って表記されている。これは次のような4通りに分類できる。なお、矢印の左側に「ソウル版」、右側に「平壤版」の表記を示した。

(1) 「平壤版」(1949)で絶音符が付されだけの語。

(例) 갈빛대→갈비' 대、귀구멍→귀' 구멍、날숨→날' 숨、먼저' 번→먼저' 번、손가락→손' 가  
락、윗입천장→위' 입천장、잇몸→이' 몸、윗잇몸→위' 이' 몸、콧구멍→코' 구멍、콧소  
리→코' 소리、헛바닥→헛' 바닥、울대머리 (喉頭)→울' 대머리 (喉頭)、코소리로 바  
꾸임 (鼻音化)→코' 소리가 됨 (鼻音化)、날숨 (呼氣)→날' 숨 (呼氣)、울대 (氣管)  
→울' 대 (氣管)、울대마개 (會厭)→울' 대막애 (會厭)

(2) 「平壤版」(1949)で漢字での表記を朝鮮文字表記に換えたものや、朝鮮固有語の語彙に置き換えられたもの

(例) 氣流→숨' 기운、音價→음' 가、古語→예' 말、氣管→울' 대、喉頭腔→울' 대머리 안、鼻  
音→코' 소리、低音→저음' など

(3) 「平壤版」(1949)で朝鮮文字表記に換え、カッコ内に漢字表記も付されたもの。

(例) 齒科→치' 과 (齒科)、古音→예' 말소리 (古音)、耳鼻咽喉科→이비' 인후' 과 (耳鼻咽喉  
科) など

(4) 「平壤版」(1949)での加筆などにより、「ソウル版」(1947)には対応する語がみられないもの。

(例) 가운데 헛' 바닥、뒤 헛' 바닥、송곳' 이、손' 가락、앞 헛' 바닥、앞' 이、작은 어금' 이、위'  
입술、큰 어금' 이、앞' 이 구멍 (門齒孔) など

#### 6-1-2. 分かち書きについて

「ソウル版」に比べ、「平壤版」では全体的に分かち書きが少なくなっている。これは、朝鮮

民主主義人民共和国が進めてきた分かち書き法改革の原初的な様相を示すものと思われる。

(例) 한 번→한번, 입 밖에→입 밖에, 여러 가지→여러가지, 먼젓 번→먼저' 번, 들이 쉬는→들이쉬는, 내 쉬는→내쉬는、

### 6-1-3. 語尾-여の使用

「ソウル版」では하다の語幹でのみ用いられる語尾여が、「平壤版」では、朝鮮語語文研究会の当時の綴字法に準拠して、하다以外にも「되여서→되여서, 생기었다→생기였다, 달리었는데→달리었는데」のように、語幹末が「, ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ」の用言にも用いられるようになっている。「平壤版」46頁、47頁の「音の縮約と消失」の解説では、개였다が갸다, 개여서가개서, 세여서가세서에代わるといった例が、多数紹介されている。

### 6-1-4. 開音節の体言につく指定詞이다

「ソウル版」では「소리다」（音だ）のように、開音節体言につく指定詞이다の語幹이が省略される傾向にあるが、「平壤版」では省略されない傾向にある。(例) 소리다→소리이다, 울대머리（喉頭）다→울'대머리이다

### 6-1-5. 数詞

「ソウル版」で用いられた漢数字は、「平壤版」ではアラビア数字に置き換えられている。また、漢数詞が固有数詞に置き換えられた場合も見られる。

(例) 一九二八年→1928年、檀紀四二八〇年三月→1949年10月、一ヶ月→한달、六時間→여섯 시간

## 6-2. 語彙・表現の民族化（俗語化）

「平壤版」では「ソウル版」で用いられた漢字語の一部を朝鮮固有語の語素を用いた語に置き換え、語彙・表現の民族化（俗語化）が図られている。ここからも、言文一致文体により一層近づけようとした意図が読み取れる。

無數한→씩 많은, 許多한 소리→많은 소리, 不過하다→지나지 아니하다, 同一한→같은, 強하게 하는→세게 하는, 音波를 同伴하여내는 濁音→음파가 따라 나오는 소리인 흐린 소리, 聲門→소리 문, 振動→떨림, 振動시키면→떨게 하면, 聲帶의 振動으로→목청이 떨리어서, 緊張시키고→켁기고, 氣流→숨'기운, 平音→예사 소리 (平音), 平音 (예사소리) →예사소리 (平音), 激音→거센 소리 (激音), 淸音 (맑은소리) →맑은소리 (淸音), 濁音 (흐린 소리) →흐린소리, 鼻音→코소리, 調整 軟骨→고름 여진뼈 (調整軟骨), 長音→긴 소리, 古語→예'말, 古音→예'말소리 (古語), 小論文→작은 논문, 더 큰 全開圓唇



音으로→더 크게 벌린 둥근 입술로, 목청의 長과 厚→목청의 길이와 두께 (厚)、高低의 變動→높고 낮은 변동、兒童의 목소리→아이의 목소리、低舌位의 低舌音이요→뒤 혀의 위치, 낮은 혀의 자리요、破障音과 摩擦音에는 聲帶 破障音を 同伴하여 내는 硬音이 있고→터침소리 (破障音) 와 갈림소리 (摩擦音) 와 터쳐 갈림소리 (聲帶 破障音) 가 따라 나오는 硬소리 (硬音) 가 있고、六時間씩→여섯 시간씩、人造 口蓋→만든 입천장、左右 肺의→왼 쪽과 바른쪽 두 폐의、請으로→요청 (要請) 으로

また、聲 (Voice) → “소리” (聲)、アクセント (Accent) →アクセントのように書き換えられて、「平壤版」ではロシア文字以外の欧米語アルファベット表記は、全く用いられていない。本稿5-26で紹介した「ソウル版」28頁18行目から29頁6行目までの英語、ドイツ語、フランスの発音を例にとった連音の解説が、「平壤版」ではすべて削除されているのも、同様の傾向とみることができる。ただ、5-14で紹介したように、ロシア語については、その“h”音を例示した説明が加筆されている。

## 7. 終わりに

以上、本稿では李克魯がソウル (1947年11月) と平壤 (1947年12月) で出した2冊の『実験図解 朝鮮語音声学』の対比を行ない、若干の考察を試みた。本稿「はじめに」で述べたように、平壤で発行されたもの (「平壤版」) は、これまで少なくとも韓国の研究者は、誰も目にしていないと思われる。したがって、本来であれば、「平壤版」全体のコピーを紹介すべきだが、本稿では紙面の許す限り、相違点が顕著な部分を紹介するように努めた。両者を比較してみたところ、語彙・表現の書き換えが全体にわたって随所にみられる。また、本稿で具体的に示したように、「平壤版」では「ソウル版」の一部を削除したり、「平壤版」で新たに加筆したりしている。しかしながら、その全体的な構成においてはあまり違いがなく、「平壤版」は「ソウル版」の改訂増補版であると言える。この本は、当時の朝鮮語研究の水準からすれば、音響音声学という全く新鮮な学問分野を紹介したという点で、画期的なものであった。この点で、朝鮮語学史においては議論の対象となっているが、その学術的側面については、現代の学問水準からみれば、さほど論議の対象とはなりえない。ただ、朝鮮の近代史に巨大な足跡を残した李克魯という研究者個人、あるいは朝鮮語学史を探究するうえで、「平壤版」の分析・考察も欠かせない作業であるだろうという点には、いささかの疑問も感じない。

「平壤版」の序文から、越北した作曲家金順男の協力を得たことや、平壤でもオシログラフを用いた研究をしたこと、著者李克魯がパリで朝鮮語音声研究の被験者になった時期が1928年3月であったことがわかるが、今後これらの点についても、更なる研究が必要であろう。

「平壤版」の発行は、朝鮮語学会が制定した「朝鮮語綴字法」(1933年)の使用をやめ、朝鮮

語文研究会が形態主義表記原則を徹底させた「朝鮮語新綴字法」の本格的な採用が検討されていた時期にあたり、「平壤版」では絶音符の採用、「朝鮮語新綴字法」の定めた字母ㅇやㅁの使用などにも、その影響をうかがうことができる。「平壤版」では、語彙・表現においては、朝鮮固有語の語素を生かして語彙の民族化を進めている。また、言文一致文体に近づけるため、民衆言語に基盤を置いた平易な文体を採用して学問の大衆化を図るなど、当時の朝鮮社会における革新的な息吹を感じさせるものとなっている。

## 注

- 1) 韓国での朝鮮語漢字音では「李」を [이, イ] と表記し発音するので、「이극로」と書かれ、「イ・グンノ」と呼ばれるが、筆者は当事者の立場を尊重して、北朝鮮での形態主義重視の漢字音表記に基づいた「리극로」と書き、「リ・グンノ」と呼ぶことにする。
- 2) 国際音声学会の国際音声科学第2回大会（1935年、ロンドン）において、朝鮮語音の IPA 表記が初めて世界に紹介されたが、これは、朝鮮語学会の決定に基づいて、李克魯が朝鮮語音の IPA 表記とその実験及び解釈結果を、知己のダニエル・ジョーンズに送ることによって実現したものである。（崔炅鳳：2006年、p.98）  
なお、「ソウル版」27頁には、「朝鮮語語音と万国音声記号との対照」のタイトルのもとに、母音の四角図で朝鮮語の IPA を示し、朝鮮文字と発音記号との対照表が載せられている。「平壤版」52頁でも「母音四角図」のタイトルのもとに、「ソウル版」と同様の紹介がなされている。ただ、母音一の発音表記において、「ソウル版」では短母音には非円唇奥舌高母音の u、長母音には横棒つきの ㅜ を当てていたが、「平壤版」では長短母音とも円唇中舌狭母音の横棒つきの ㅜ と ㅜ: に書き換えられている点異なる。
- 3) この小冊子を韓国で最初に紹介した高永根（李克魯博士記念事業会、2010年、pp.213-215）によれば、この小冊子は「第1章 朝鮮の開化と外勢の殺到、第2章 1910年の支配とその後、第3章 1919年3月の独立宣言とその後」の3章からなっており、その序文で李克魯は「本書は、4,000年以上政治的な独立と高度な文化を享受してきた朝鮮民族が、いかにして初めて外勢の支配下に置かれ、再び独立を成し遂げようと努力しているのかを示すことに目的を置いている。以下に記述する内容は、日本人と我々の間の野蛮な戦争の歴史のごく一部分にすぎず、つまりこれは、ヨーロッパの人々に一般的な認識を持ってもらうことに役立つようにしなければならない。朝鮮が極東で占める事情は、バルカン半島が地中海に対して占める事情と同じである。30年前から朝鮮問題は極東において強大国の政治的争いの焦点となってきた。1910年8月29日の強制的合邦によって、2,000万の人口を有する218,650平方キロの国土は、日本人の最も野獣的な武断統治下に置かれていった。」と書き、ヨーロッパで日本による朝鮮植民地支配の歴史と実態を訴えた。なお、朝鮮人人口が2,000万を超えるのは1930年代初頭のことで、1910年当時は約1,300万人ほどだった。
- 4) 李克魯の略歴等については、朴龍圭（2012）、李克魯博士記念事業会（2010）、高永根（2010）、崔炅鳳（2006）などを参考にした。
- 5) 『朝鮮語研究』（第1巻第3号、朝鮮語文研究会、1949年6月、平壤）に掲載された朴相竣（パク・サンジュン）の論文「漢字語と漢字の整理について」（「한' 자어（漢字語）와 한' 자의 정리（整理）에 대하여」）で、漢字使用を廃止する理由が次のように述べられている。

「その数が4.5万にもなる多数の漢字は漢文専門学者でも、すべては分からないゆえに、これはその性格上、階級的となった文字であるために、漢字の本国である中国でも漢字の処理に頭を悩ませている状態である。特に、わが国はかつて、漢字と漢文だけを崇め尊んだために、人民の文化が発達し得なかったとともに、わかりやすい純粹朝鮮語は非常にたくさん消失し、難解な漢字語がたくさん生じて、今日の人民文化を向上させるうえで、大きな障害物となっているが、このような障害物の基本である漢字をいつまでも継承することはできない。もし、各種の記録に漢字を混用すれば、漢字がわからない人は、いつまでも各種の記録から完全に除外されるために、人民の民主主義的思想と科学的知識技能を向上させることができず、したがって民主主義の課題を早期に完遂させることができなくなるので、これはつまり民主主義の原則から外れる差別的、封建的な進め方であると言わざるを得ない。このため、漢字は全廃することを原則としないわけにはいかない。」

続いて、「この原則のもとで、ただ、過渡期である現在の実情に照らし、考慮すべき」点がいくつかあるとして、「漢字の表記がなければ、たとえ知識層の人であってもその意味がすぐに分からない」場合は、暫定的に最小限度の漢字を適切に用いる必要があるとしている。しかし漢字を用いる場合、「各種の記録に漢字を混用すれば、漢字がわからない人民大衆を無視する結果をもたらすので、これを如何に処理すればよいだろうか？」という問題に対して、「漢字を用いるが、正式には用いず、必ず必要な場合に限って括弧の中に入れる」方式で対処するとしている。さらに、「しかし、括弧の中に入れることも、いつまでも続けるわけにはいかず、続ける必要もなくなるようになるのである。」「私たちは不幸にして、一般的には未だ完全な朝鮮語の常識を持ちえていない。李朝末までは漢文ばかりを崇め尊び、残忍な日帝時代には朝鮮語抹殺政策のために、朝鮮語は全く学ばなかったためである。今後は、朝鮮語の常識を徹底して普及させ、相当に難解な漢字語まで“문, 방, 벽, 학교, 청년……” [門、房、壁、学校、青年……] のように漢字を用いる必要がなくなれば、括弧の中にも漢字を入れることをせず、特殊な部門以外では、漢字を全廃することになるだろう」と、いずれは漢字使用を完全に廃止すると論じていた。

- 6) 金順男 (1917 ~ 1983?) は京城市 (現ソウル市) 楽園洞で出生。京城師範学校を卒業したあと、1937年に渡日し、東京高等音楽学院 (現国立音楽大学) 作曲科で2年間作曲を学ぶ。1940年に帝国高等音楽学校器楽部 (ピアノ専攻) に編入し、1942年に卒業。卒業後、朝鮮に戻りプロレタリア音楽運動の地下活動を展開。1948年に韓国政府から左翼音楽家という理由で逮捕されそうになると、越北して音楽活動を展開した。解放直後、北朝鮮で国歌の代わりとして歌われたという「人民抗争歌」は1946年に金順男が作曲し、林和 (リム・ファ) が作詞したもの。歌詞の1番は以下の通り。「원수와 더불어 싸워서 죽은 우리의 죽음을 슬퍼 말아라 깃발을 덮어다오 붉은 깃발을 그 밑에 전사를 맹세한 기발.」 (敵とともに戦って斃れた俺たちの死を悲しむな。旗で覆ってくれ、赤旗を。そのもとで戦死を誓った旗。) なお、この部分の歌詞は、ドイツ民謡「もみの木」にジム・コンネルが作詞した革命歌を、赤松克磨が1921年に訳詞した下記の「赤旗の歌」の歌詞と類似している。「民衆の旗赤旗は 戦士の屍を包む／しかばね固く冷えぬ間に 血潮は旗を染めぬ／高く立て赤旗を その影に死を誓う／卑怯者去らば去れ 我らは赤旗守る」
- 7) 「것으로만들고자」は「것으로 만들고자」と分かち書きされるべきところであるが、これのみならず本稿では分かち書き、誤植などに修正を加えず、原文通りに転載した。
- 8) 「清」は有声、「濁」は無声を指している。
- 9) この加筆部分には5か所にわたって「機械」の意味を表す語を「기계」と印刷しているが、序文では「기계」となっており、「기계」は「기계」の誤植と思われる。
- 10) 「反射鏡」の誤植。

- 11) 「照明鏡」の誤植。
- 12) 「反射鏡」の誤植。
- 13) 「앞쪽」の誤植。
- 14) 「照明鏡」の誤植。
- 15) 나타나게 된다の誤植。
- 16) 「照明鏡」の誤植。
- 17) 「受動的機能」の誤植と思われる。
- 18) 께의誤植。韓国では뻬と表記される。
- 19) 할아버지의誤植。
- 20) 脱字と思われる母音字「·」を補った。
- 21) 脱字と思われる母音字「·」を補った。
- 22) /j/ と小文字で書かれる方が相応しい。
- 23) ㅜの誤植と思われる。
- 24) 脱字。
- 25) 「朝鮮語新綴字法」は、最初の案が1948年1月15日に発表されたが、序文(머리말)には、次のようにその間の経緯が書かれている。「朝鮮語綴字法制定事業に蹶起した「朝鮮語文研究会」専門委員たちは、私たちの進歩的言語学者たちが30余年にわたって成し遂げた学問的成果をもとにして、これに深い研究と厳格な批判を重ねた結果、ひとまず成案を得、1948年1月15日に「朝鮮語新綴字法」を社会に発表した。その後、数十回にわたる各種の学術的会合で各界の人士たちの討議・検討に付し、特に1948年10月、朝鮮民主主義人民共和国内閣第10号決定書により、南朝鮮からやってきて参加した語学者たちも網羅して、朝鮮語文研究会が再組織されると、1949年7月26日には全委員が再びこの「朝鮮語新綴字法」を検討し、それに基本的に誤りがないことを再確認した。」
- 26) 現象の誤植。
- 27) あるいは、本稿の注22)で紹介した、1949年7月26日の「再確認」のことかもしれない。

#### 参考文献

- 李克魯『實驗圖解 朝鮮語音聲學』(1947)『歴代韓國文法大系』第41冊(1986)所収, 塔出版社  
李克魯(1949)『실험도해 조선어 음성학』, 朝鮮語文研究会  
朝鮮語文研究会(1949)『조선어문법』(1950年11月5日, 延辺教育出版社発行版)  
李克魯(1958)「소위 《6 자모》의 비과학성」『조선어문』1958年第4号  
李相億(1989)「李克魯(1947), 「實驗圖解 朝鮮語音聲學」」『周時經學報』제3집, 탐출판사  
高永根編(2000)『북한 및 재외교민의 철자법 집성』, 도서출판 역락  
高永根編(2001)『조선어연구2』, 도서출판 역락  
朴龍圭(2005)『북으로 간 한글 운동가』, 도서출판차승  
崔旻鳳(2006)「제2회 2005년 東崇學術財團이 선정한 언어학자李克魯(1983-1978)」『東崇學術財團消息』第10號, 東崇學術財團  
高永根(2008)『민족어의 수호와 발전』, 제이앤씨  
李珍吳(2009)『국어 음운 교육 변천사』, 박이정  
高永根(2010)『민족어학의 건설과 발전』, 제이앤씨  
李克魯博士記念事業會(2010)『이극로의 우리말글 연구와 민족운동』, 선인  
朴龍圭(2012)『조선어학회 항일투쟁사』, 한글학회